# 戦艦探偵・金剛～比叡の悲劇～

瀬場拓郎

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

＊注意＊この物語はフィクションであり、実在の地名、人物、動物が出てきても我々の生きる現実世界とは一切無関係である。いいね？＊注意＊

稀代の女流探偵、金剛が過労でぶっ倒れた！

静養させるにはやっぱり旅館だよね。

というわけで富山の旅館にやってきた金剛と五月雨。

そこでは戦後、海軍を除隊した比叡が女中として働いていた。

ところが名探偵の宿命か、そこでも殺人事件が起きてしまう。

しかもその犯人は……比叡!?

「ああ、比叡の無実を証明するのね」と思ったあなた、そうではありません。

何故なら……。

１９５０年代の日本を舞台に、戦艦の艦娘にして稀代の女流探偵・金剛が謎を解く短編！

# 目次


前説 ―― 1
比叡の戦後 ―― 3
来客 ―― 10
起こる悲劇 ―― 19
矛盾する死体 ―― 33
消えた三品① ―― 37
消えた三品② ―― 47
宗助のアリバイ ―― 56
池の鯉 ―― 65
あの日、何が起こったか？ ―― 69
エピローグ ―― 78

# 前説

ようこそ、金剛探偵事務所へ。
私は金剛探偵事務所で助手をしている五月雨っていいます。
深海棲艦との戦いも終わって、退役した金剛さんは、なんと女流探偵として東京に並ぶ者が無い名探偵として活躍しているんです。
だけど八月に入ってからというもの、いくつかの事件がいっぺんに来て私も金剛先生もてんてこ舞い。もちろん、一番頑張るのは先生ですから、一番疲れるのも先生と言うわけで、最後の事件を終えた直後に倒れてしまいました！
これには私も、事務所のオーナーである大淀さんも大慌て。急いでお医者様を呼びました。すると、わざわざ事務所に来てくれたお医者様は一通り先生を診た後でこういいました。
「単なる過労じゃな。しばらく静養せい」
というわけで、しばらく私たちは事務所をお休みしたわけですが、あの先生がおとなしくじっとしているわけもなく、
「退屈ネー！」
「事件が欲しいネー！」
と毎日喚きます。憂さ晴らしに私たちが飼っている猫、フーちゃんと遊ぼうとするのですが、先生とフーちゃんは相性が悪いらしく、喧嘩ばかり。フーちゃんが、
「シャー！」
と威嚇すれば先生も、
「シャー！」
と威嚇し、最後には取っ組み合い。まるで猫が二匹、事務所の中にいるようです。
こんなことでは今度は私が倒れそう！
そんな折に、事務所へ比叡さんからあのハガキが届いたのでした。
比叡さんは海軍を除隊した後、
「自分探しの旅に出る」
と言ってプラリと消えたのが最後でした。しかしどうやらこのハ

ガキによれば、今は富山県の温泉宿『珍授荘』で女中として働いているようです。わざわざ『良かったらお姉様と遊びに来てください。値段も少しサービスします』という一文が添えられていました。

渡りに船とはこのことです。静かな山間にひっそりと佇む温泉宿で静養すれば、金剛先生もリフレッシュ出来ることでしょう。特に値段も少しサービスしますという一文には、抗いがたい魔力があります。

金剛先生も二つ返事で了承し、私たちはハガキを受け取ったその日のうちに、早速荷造りと旅館の予約を行いました。フーちゃんをオーナーの大淀さんに預けて、珍授荘へ向かいました。

しかし、ああ、何ということでしょう！

ゆっくりと静養するはずだった温泉宿で、私たちはまたしても事件へ遭遇することになったのです！

しかもその事件に、私たちを温泉宿へ誘った比叡さんが大きく関わることになるとは、誰が予想できたことでしょう？

それでは戦艦探偵・金剛～比叡の悲劇～、お楽しみください！

# 比叡の戦後

比叡は朝食の載った配膳盆を抱えて二階を上がっていた。この程度の作業、深海棲艦と比べるまでもないのだが、はたから見ると膂力と足腰に感嘆を覚えるらしく、年増の女中からは、

「流石ねぇ」

とよく言われた。実際には感心する振りをして、力仕事を押し付けられているだけかもしれないが、それならそれで構わない。気合い一発、どんな仕事でもやるだけだ。

旅館の二階、五番の襖の前で声をかける。

「おはようございます伊藤様。朝食をお持ちしました」

「ああ、どうぞ」

比叡は部屋に入り客へ向かってお辞儀をする。

五番の部屋の客、伊藤高次郎は六十代くらいの年配の老人で、同じく妻の伊藤咲江と共に富山へ来たのだ。高次郎は元々、東京から妻とここへ疎開してきたのだという。戦争も終わってしばらくした後に、お世話になった富山の方々へ挨拶するためにここへ来たのだという。

二日前に部屋へ通したときに、その話を延々と三十分ばかり聞かされたが、それも仕事の内だった。ときに客はいい人ばかりではない。ここへ来た理由や、人となりを知ることで、どのように接すればいいのかも分かってくる。それに、比叡の知らない人生の一端に触れたようで、面白かった。

伊藤夫妻は既に着替えを終えてお茶を飲んでいた。予定では、もうすぐに発つことになっている。朝風呂は既に済ませたようで、二人とも髪の毛が少し濡れていた。

比叡は正直、あまり広いとは言えないちゃぶ台に精一杯、料理を並べてお品書きを説明していく。高次郎が一々、うんうんわかったと頷くのが少し滑稽だった。

その後、比叡は賄いの朝食を食べ、女将と一緒に伊藤夫妻を見送った。それから五番の部屋の食器を下げて、布団を畳んで干して、シーツを剥がしてクリーニングに出し、部屋を掃除する。それから部屋の

内装を整えると、それで伊藤夫妻が三日間過ごした痕跡は跡形もなく消えた。
今日の風呂掃除は別な女中の担当だから、午後の仕事まで暇になった。特に特別な用事のないものは、一端家に帰って家事仕事をしたり、育児をしたり、旅館のロビーにある囲炉裏でお茶を飲んだすることになった。
「くぅ〜、今日もいい朝だ〜！」
比叡は旅館裏手、はるか遠くにそびえたつ飛騨山脈へ向かって、大きく伸びをした。日本アルプスと呼ばれるだけあって、遠くから見ても岩肌が、緑の布を破って突き出している感じが写真で見る外国っぽかった。八月の晴天の下、その姿はいつにも増して穏やかに思えた。
「その様子だと、今日も絶好調かい？」
「ヒエッ！」
一人きりだと思い込んでいたので、比叡は右からいきなり声をかけられて驚いてしまった。すると藪の中から敷島宗助が、銀色に光るボウルを片手に笑って姿を現した。
「もう！　脅かさないで下さい！」
真面目に怒ったつもりだったが、慌てたせいか最後の「さい！」が裏返って変な感じになってしまった。
「ごめんごめん」
宗助が笑いながら謝った。彼はこの旅館の女将、敷島野々江の息子であり経理を担当している事実上の跡取りだ。終戦後、軍隊の方で手違いがあって帰国出来ず、そのまま東南アジアの方で復興の支援をしていたところを、去年になってようやく復員してきたのだ。
年は二十三歳で、身長は比叡よりも少し低い。東南アジアにいたせいか、肌は健康的に日焼けしていた。元々軍隊では主計を行っていて、それで旅館へ帰ってからも経理を行っているのだが、現地では復興のための瓦礫除去や家屋の建設にも関わったそうで、体は思ったよりも筋肉質だった。
復員して働き始めた当初は、
「和服が似合わない」

という理由で背広を着ていたのだが、身長が低いからかえって子供っぽく見られてしまい、ボーイと間違えられることが多いので今ではみんなと同じく従業員専用の浴衣に袴を着ていた。比叡からみても、宗助は背広よりも、ずっとそちらの方が様になっているように思えた。

そんな宗助が執心しているのが、旅館裏手の池に住む錦鯉だった。

今は雑草と藪に覆われて、一見して分からないが宗助の話だと祖父が健在だったころは、それは見事な日本庭園だったそうだ。

しかし祖父が死んで、時を同じくして父親が失踪した矢先に戦争がはじまり、宗助は徴兵されることになった。世間の人々の心の荒廃を映すかのように、祖父が作り上げた庭園も荒廃し、やがて現在のようになってしまったのだ。

祖父の作り上げた庭園を、子供ながらに愛していた宗助は現状を見て少なからず落胆を覚えた。唯一の救いは、池にいる錦鯉が意外なほど大きく立派に成長していることであった。

「庭はちょくちょく手入れをしているつもりだけど、やっぱりこう忙しくっちゃねぇ。鯉の相手が精いっぱいだ」

「鯉に恋してるって感じですね」

「つまらないダジャレはよせよ。さっきの悲鳴と言い、比叡さんはそういう洒落が好きだよね」

「あれはダジャレじゃありません！」

比叡が抗議すると、宗助はそう言って、ボウルからパン屑を池に向かって投げた。すると池の鯉たちは背びれを翻して、池の水を飛ばした。その水は、池のふちに座る比叡の顔にまで届いた。

「きゃっ！」

「鯉も君の洒落が気にくわないそうだね」

宗助は笑いながら、ハンカチを取り出して比叡の顔を拭った。

「全く、泥が跳ねて綺麗な顔が台無しだ」

「うぐ」

綺麗な顔と言われて、比叡は照れて固まってしまう。

「なぁ、比叡。さっきは僕に驚いたようだけど、君の方だって僕がこの

時間、ここにいることはよく知ってるだろ？」
　図星だった。伸びのときの声が聞こえる程、近くにいることは予想していなかったが、宗助がここにいることは確かに期待していたのだ。
「うう～」
　宗助の顔が迫る。比叡が目を閉じると、唇を優しく吸われた。鯉の餌が入ったボウルが落ちる音が聞こえて、宗助の唇が比叡の首筋へと走った。
「あっ、駄目、駄目です。女中がこんな時間から、そんなところに新しいキスマークつけてたら、お客さんにだって変に思われちゃいますし、野々江さんにしかられちゃいますよぉ……」
　宗助は少々、不満げに鼻を鳴らして、
「それもそうか」
　と、身を引いた。
「いや、ごめんごめん。つい」
　先ほどとは打って変わって、本当にすまなそうに宗助が言うと、比叡の体の熱も冷めて、二人の関係は再び旅館の経理と女中へと戻った。
　比叡はチラリと鯉の方を見て、それから餌の入ったボウルを拾って宗助に渡した。
「鯉、やっぱり変わらないですね」
「ああ」
　と、宗助は残念そうに答える。
　彼が復員し、池の鯉の成長に安堵したことは先にも述べた。しかし池の鯉たちは、宗助の記憶にある姿よりもたいぶくすんだ色をしていた。
　最初は池が汚れているせいかと思ったが、清掃をしても鯉の様子は変わらなかった。むしろ水質が清らかになった分、余計に鯉のくすみが明確になった。宗助が帰って来るまで、鯉たちは池に沸いた虫や苔を食べていたようだが、餌を変えても結果は変わらなかった。
「これは新潟の方へ行って、専門家に見てもらわなきゃならないかも

しれないなぁ」
「そのときは――――」
比叡は宗助の肩に頭を乗せて、
「私もお供させて下さいな」
二人の関係が再び恋人に戻ると、宗助は微笑んで、
「ふふっ、じゃあ、今から母さんに使う言い訳を考えておかなきゃな」
と、言った。
そんな二人のやり取りを旅館の二階から見つめるものがあった。
宗助の母親であり、旅館の女将を務める敷島野々江である。野々江は宗助が比叡を押し倒そうとして、止めたところを確認し、ほっとしたような、残念なようなため息を吐いた。
年齢は四十五であるが、傍目からはそれよりも一回り老けて見えるのは、それなりに苦労を重ねたせいだろうか。確かに終戦から数年、一向に復員してくる様子もなく、かといって戦死したという知らせもない息子の帰りを待つのは、並大抵の心労では無かった。
だが自分がめっきりと年を取ったと実感したのは、むしろ宗助が帰った後のことだった。山で遭難した人間が、それまで生きていたのに救助の人間を見た途端に安心して死んでしまうように、自分も宗助が帰った後では、いつ死んでもいいような気がした。
しかし人間、欲望は尽きないようで、今度は息子の嫁が気がかりになってきた。新聞を見ると、夫の財産をだまし取って新しい男とのうのうと逃げ去る悪女の記事がよく出てくる。宗助も旅館の跡取り息子で、家にもそれなりの財産があるから、それを聞きつけたどこぞの女が悪さを死に寄ってくるかもしれない。そう考えると、
「息子が帰って来るまで死ぬに死ねないわ」
と思っていたところが、今度は、
「息子にいいお嫁さんを見つけるまで死ぬに死ねないわ」
に変わってきた。
すると、息子が結婚したら、やだ、私また老け込むのかしら？
ガラス窓に反射する自分の顔を見て、野々江は思わず顔に手をやった。でも、それはそれでいいのかもしれない。きっと人間は、そう

やって年を取っていくのだろう。
比叡はいいお嫁さんになってくれるだろうか？
窓の下にいる二人を見て、野々江は考える。二人はあの藪に囲まれた庭にいれば誰にも見られないと思い込んでいる。確かにあの場所は二階からもそう簡単には覗けない。だが、トイレ脇にあるこの窓からは、木の枝の隙間を縫って、池の周辺がくっきりと見渡すことが出来た。
こんなデバガメみたいな真似、はしたない……。
自分でもそう思って自己嫌悪に駆られてしまうが、やはりこうして二人きりで会っているところを見ると心配でついつい見てしまった。結局はごめんなさいね、と心の中で舌を出し、最後まで覗いてしまう。
野々江が比叡を雇ったのは宗助が戻ってくる三年前、終戦から半年ほど経ったころのことだ。
当時、ここ珍授荘は傷病兵の慰労施設に指定されており、たくさんの兵士が傷を癒したり湯治に来ていた。
そこへひょいと顔を出したのが、比叡だった。何でも以前は海軍の艦娘だったが、戦争が終わって退役してからは貯金を食いつぶして全国を放浪していたらしい。ここへ来たのも、慰労施設に指定されていることを知らずに宿を求めてやって来たということだった。
当時の珍授荘は、毎日やってくるたくさんの傷病兵相手に、猫の手も借りたいくらいの忙しさだった。兵士の中には、精神を止んで粗暴な振る舞いをする者も多く、腕っぷしのある比叡はまさにうってつけの人材だった。そこで一ヵ月の間だけ手伝いをお願いしたのだが、なんやかんやと引き伸ばしになり、とうとう珍授荘が慰労施設指定を解除されて元の旅館に戻っても働いてもらうことになった。
比叡は器量もいいし、よく働く。女だらけの艦娘で働いていたせいか、節々に女性にしてははしたない面があったが、それを補って余りある明るさと、不思議な気品があった。野々江は自分が生んだのがもし、娘だったのならという感情を比叡に抱くほど、彼女が好きになっていた。
そこへ待ちに待った宗助が帰ってきて、不思議と比叡に女らしさが

身につくようになっていた。もしやと思ってこっそりと、宗助を見張っていると、案の定、二人は野々江に隠れてこっそりと逢引きを重ねていたのだった。

自分に隠れてこそこそしているのは気にくわないが、二人が好き合っていることに野々江は満足していた。比叡の立ち振る舞いからして、間違いなく処女であろう。宗助の影響で女性らしさを身に着けた今となっては、女中としての振る舞いも堂々たるものであった。何より性格に裏表がないのがいい。少なくとも宗助を陥れたりするようなことはないはずだ。

あとはいつ、野々江に結婚を切り出してくるかだった。だがどうも二人とも、肝心なところで何だか煮え切らないところがある。それはそれで青春の初々しさがあって微笑ましいのだが、もう十分な齢を重ねた野々江にしてみれば、無駄に遠回りをしているような気がしてならない。

やっぱり、こちらから話を切り出してみようかしら。

中庭の二人からようやく視線を離し、野々江は廊下を歩き始める。

私が二人の仲を認めれば、あとは押すなり引くなりあるでしょうよ。

野々江が目を閉じる。するとそこには、紋付袴を来た宗助と、白無垢に身を包んだ比叡の姿が浮かぶようだった。

その様子を想像すると、自然と野々江の口元に笑みがこぼれた。

息子が結婚したら、今度は初孫か。

そうなれば自分はいよいよおばあちゃんと呼ばれるようになる。

だが、そんな幸せな想像もすぐに立ち消えた。予期せぬ客が、彼女の前に現れたのだ。

# 来客

午後三時から、再び比叡の仕事が始まった。予定ではまさに今から金剛と五月雨がやってくるはずである。

二人とは除隊以来、一度も顔を合わせたことは無かった。それを言うなら、比叡はあれいらいどの艦娘とも会っていない。ただ金剛だけは、

「何かあったら言うネ！」

と、比叡に事務所（と言っても、当時はまだ開設予定地に過ぎなかったのだが）の住所が書かれた名刺を渡してくれたのだった。

探偵事務所など、この日本で本当に需要があるのだろうか？　そう心配していた比叡であったが、読者もご存知の通り比叡の活躍は全国紙の新聞に載るほど名だたるものであり、つい最近も東京の資産家から盗まれたダイヤモンドを取り戻して表彰されてと言う記事を読んだばかりだ。ミーハーな同僚も、やってくる宿泊客ですら挨拶代わりに金剛の話をするという有様で、比叡はそんな姉が誇らしいと同時に、自分がそんな姉の妹で何だか恐縮してしまうような、複雑な気分になるのだった。

だから、金剛に暑中見舞いのハガキを送って、返事が返ってきたときは自分から誘っておいて驚いてしまった。

お姉様、私のことをやっぱり気にかけてくれていたんだ。

そう思うと、比叡は背中がしゃんとする気分だった。

一方で、五月雨が金剛の助手をしていることがちょっと意外だった。あの二人が特別、仲が良かったという記憶は比叡の知る限りでは無かった。それに五月雨は除隊する前に、客船の乗務員に就職が決まっていたはずだ。いったい、どういう経緯で金剛の助手をするようになったのだろう？

まぁ、それは直接聞いてみればいいか。

気を取り直して比叡が玄関口で客を待っていると、道路から一台のタクシーがやってきた。後部座席に座っているのは、一人でどうやら金剛ではないらしい。

ちょっと残念だが、当然、顔には出さない。比叡はタクシーに向かって笑顔でお辞儀をした。
すると車の中から肥満体の男が姿を現した。髪は少々禿げ上がっていて地肌がうっすらと見える。太い黒縁の眼鏡をかけていて、肌は浅黒いが日焼けと言うよりも病的な感じだった。ワイシャツと黒いズボンを履いていて、腰に巻いたベルトはなんだか今にもはち切れそうだった。
タクシーから荷物を出して、首にかけた手拭いで顔を拭き拭き、男は向かってくる。
「いらっしゃいませ！」
男が玄関口へ上がる。比叡はスリッパを出して、男の靴を揃えた。それからふと、受付を見ると、野々江が男の顔を見て表情を固くしているのが見えた。
「やぁ、久しぶりだね野々江さん」
男が言った。傍から聞いてもねっとりとした、何だかいやらしい声だった。野々江は表情と同じく固い声で絞り出すように、
「ええ、そうですわね。日暮さん」
「何だぁ、つれないな。そういえば、宗助くんが復員してきたんだってね。最後に会ったときは、十二歳くらいだったが、月日が流れるのは早いねぇ……」
「今日は何の御用かしら？」
「部屋は空いているかい？」
「ええ」
「じゃあ、一泊させてもらうよ。積もる話もあるしね」
そこへ宗助がやってくる。
「やぁ、宗助くん！」
日暮が宗助へ向かって手を挙げて挨拶した。
「復員おめでとう！　覚えているかな？　君のお父さんの友達だった日暮恭平だよ」
宗助は一瞬、ポカンとした後で思い出したように、
「日暮さん……」

と、野々江と同じくやや固い表情で答えた。
「宿の景気はどうだい？　傷病兵の慰安施設に指定されて、がっぽりと儲かったんじゃないか？」
「比叡、日暮様を十番の部屋へお連れして」
野々江がぴしゃりと言って、比叡は背筋をぴしゃんと伸ばした。
「はっ、はい！」
比叡は慌てて返事をすると、
「鞄をお持ちします」
と、日暮の持っている黒皮の鞄を手に取った。
「おや、悪いねぇ」
日暮はそう言いつつ、嫌らしい笑みを浮かべた。
「じゃあ、お二人とも、後でね」
捨て台詞を残して、日暮は比叡と共に二階の隅にある十番の部屋へと向かった。そこは受付から最も遠く離れた部屋で、比叡は何となく日暮を遠ざけておきたいという野々江の心理を感じた。
「ところで、君はこの辺では見たことない顔だね。新入りさんかい？」
「はい」
「ふぅん」
比叡は男が背後から自分の体を上から下まで舐めまわしているような視線を感じた。こういう客は初めてではないが、日暮には底意地の悪い、性根の濁ったようなものを感じて比叡は何だか恐ろしかった。
とっとと案内して逃げてしまおう。
そう思って日暮は少々足早に十番の部屋へ向かい、扉を開けて荷物を置いて失礼した。部屋を後にしようと振り返ると、
「ふふ、一晩だけどよろしく頼むよ」
日暮にそう言われながら尻を撫でられ、比叡は背筋がぞっとするような思いで、
「しっ、失礼いたします！」
と、部屋を後にした。日暮の手の感触をかき消そうと、尻を摩りながら、比叡は泣きそうになりながら受付へ向かった。

もう、なんなのあの人！
廊下を歩いていると、同じく女中の田島がいた。田島はこの温泉宿で、野々江が女将になる前から働いていた古参の女中だった。さすがに寄る年波には勝てず、布団を運んだり、配膳は比叡などの若い女中に任せているが、忙しい女将に代わって女中に指示を出したり、掃除をしたり、道具の管理なんかを任せれている。
田島は比叡をみるなり、
「やっぱり日暮様ね」
と、ため息を吐いた。やはりあの日暮と言う男はこの旅館と何か因縁があるらしい。
「いったい、何なんですかあの人」
比叡が小声で田島に訊ねた。いつもなら客の悪口を許さない田島であったが、今回ばかりは別らしかった。困ったような顔で床を見つめて、
「あの人はねぇ、この宿のパトロンなのよ。正確にはあの人のお父さんが出資したのだけれどね。戦争が始める前、世界恐慌があってこの温泉宿の経営が悪くなってた時期があってねぇ。そのときの旦那様が方々に当たってようやくお金を貸してくれたのが、日暮恭介と言う、今やって来た恭平様のお父様なの」
「え？　ということは珍授荘はあの人に借金があるということですか？」
「ええ、まぁ、そういうことになるわね。先代の恭介さんはおおらかな人で、宿の経営状態が良くなるまで返済を待っていてくれてね。特に返済期限なんか決めずにいてくれて、おかげで前の旦那様の代で大部分は返し終えたのだけれど、恭介さんが亡くなられて恭平さんに債権が移ると途端に返済を迫るようになったのよ。返済と言っても、全額を一気に返せという風でもなく、思いついたように数年ごとにやってくるのよ。ここ最近は、この宿が療養施設に指定されたこともあって近づかなかったようだけれど、聞くところによれば日暮家もあの人が旦那になってだいぶ、経営状態が芳しくないらしいわ。おおかた、家にお金が無くなったからこうしてチマチマとはした金を絞りに来た

のよ、きっと」
田島が珍しく吐き捨てるように言うと、途端に我に返ったようになって、
「いけない私ったら。部屋を見回る途中だったのに。ごめんなさいね比叡ちゃん。何だか引き留めちゃって」
「いいえ、いいんですよ」
そう言って階段を下りて、ロビーへと向かった。
すると、
「へーイ！　私の名前は金剛！　こっちのちんちくりんは五月雨デース！」
という心底能天気な声が玄関から響いた。比叡が階段を降りると、そこにはロビーの受付に向かう金剛と五月雨の姿があった。
「いえ、ですからこちらの台帳に名前のご記入を……」
野々江が困ったような笑顔を浮かべて、クリップボードに留められた台帳を差し出す。
「オー、ソーリー」
金剛はペンを取って、台帳に名前を記入する。
「お姉様！　五月雨ちゃん！」
比叡が声をかけると、金剛も比叡に気が付いたようだった。
「ワオ！　比叡！」
二人は近づいて抱き合った。
「本当に久しぶりダヨ！　全く！」
「ひえええ、すいませんお姉様」
そう言いながら、比叡は言った。金剛から体を話すと、自分が泣いていることに気が付いた。
「お久しぶりです比叡さん」
五月雨がペコリとぎこちなくお辞儀をする。
「うん、本当に久しぶり」
比叡が涙を拭うと、
「比叡、金剛様を一番の部屋に案内して差し上げて」
と、野々江が言った。それから比叡の肩にそっと手を置いて、

「少しくらいならお姉さんとゆっくりしててていいわ」
「ありがとうございます」
比叡はそう言って金剛と五月雨の荷物を持ち、
「さ、着いてきてください！」
比叡が言うと、金剛は、
「イエーイ！　縦隊陣形で行進デース！　ヨーソロー！」
と腕を振り上げた。
「先生、他のお客さんに迷惑ですよ」
五月雨が慌てて窘める。
金剛と五月雨の来訪により、比叡は日暮が振りまいた黒い瘴気は跡形もなく消し飛んでしまった。

野々江が金剛と五月雨にあてがった一番の部屋は、文字通りお風呂もトイレも近い一番いい部屋だった。
「遠いところからお疲れになったでしょう？」
荷物を下ろして比叡が三人分のお茶を淹れる。
「ええ、まぁ」
五月雨がぐったりとした様子で答えた。一方、金剛は広縁の窓を開けて、
「いい景色デース！」
と、窓の向こうに広がる雄大な飛騨山脈の前で仁王立ちした。明かりを点けてはいるが、窓から日差しが差し込むと相対的に部屋の中が暗く感じた。逆光の中で金剛の暗いシルエットが浮かんでいるのが、比叡にはこの上ない風情に感じられた。
「お姉様、お茶が入りましたよ」
「サンキュー」
金剛が身をひるがえして机へ戻ってくる。比叡は金剛と五月雨にお茶と茶菓子をすすめた。
「変わったお菓子ですね」
五月雨が白い長方形の菓子を明かりに透かして言った。
「富山の銘菓、月世界です」

「ふぅん」
五月雨が齧ると、白い粉が口元から飛んだ。
「ところで、お二人はどうやってここまで来たんです?」
比叡が訊ねた。金剛が答えるところによれば、東京駅から新潟までだいたい上越線を上り、昨日は群馬で一泊したという。その後、上越線から宮内駅で信越本線に乗り換えて富山市へ辿り着き、そこから上滝線と立山線を乗り継ぎ、タクシーでここまで来たのだという。東京から群馬まで十一時間、そこからここまで九時間近くの長旅だった。
「あと少しで戦艦じゃなくて鉄道になるところだったデース」
金剛がそんな冗談をいいながらお茶を啜って、月世界をかじった。
「鉄娘ですか。何だかいそうですね」
五月雨が口をモグモグさせながら言った。
「いそうって、どういうこと?」
比叡が訊くと、
「いえ、別に」
と五月雨はお茶を飲んでその場を濁した。
「しかし比叡が旅館の女中デスカー」
金剛は机に肘をついて比叡を面白そうにジロジロと見た。
「何か変でしょうか?」
襟足を指で触りながらドギマギとしていると、
「ノー、そんなことないデース。とっても似合ってマース。問題はどうしてこの旅館で働こうかと思ったかデース」
「そうですね……」
比叡は遠い目をして、ポツリポツリと話し始めた。
みんなが海軍を除隊して、就職していく中で私は自分がどんな仕事をやりたいのか、よく分かりませんでした。というより、今、決めていいのかと思いました。私たちは太平洋の色々な場所で戦いましたが、日本へ帰って地図を眺めていると、実際には日本のことさえ何も知らないような気がしたのです。しばらく日本を回って、色々なものを見たり聞いたり食べたりしてからでも遅くはないんじゃないかと。
ここへ来たのは、ちょうど九州の方から適当に電車でふらりと立ち

寄っただけのことでした。地図を頼りに宿を探している内に、ここへ辿り着いたのですがそこは傷病兵の療養施設に指定されていて、帰ろうかと思った矢先にここの女将から働かないかと打診を受けました。
　ま、路銀も少しばかり減っていたしアルバイト感覚で最初は始めたのですが、みなさんのお役に立つ内に居場所が出来てしまって、こうして人の役に立つものいいかなぁ、なんて思えるようになってきました。
「まぁ、要するに色々と遊び回っている内にここへ辿り着いて、いつのまにか働くようになってしまったということなんですけどね」
　色々と見て回りたいと言っておきながら、結局は地方の旅館の女中に行き着いてしまったあたり、自分の浅はかさを呈したようで比叡は自分から話しておいて気恥ずかしさを覚えた。しかし金剛は首を横に振って、
「そんなことないネ。遠回りのように思えても、それは比叡が安易な結論に飛びつかずに、最後まで考え抜いた結果デース。なかなか普通の人には出来ないことダヨ」
「そうです。私も立派だと思います。何より、今の比叡さんは何か、その、前よりもずっと綺麗で女らしいというか……」
　五月雨が言うと、金剛は口元を怪しく歪めて、
「さては恋人でも出来たネ？」
「ヒエッ」
　比叡は思わず短い悲鳴を上げて、
「いっ、いやですよぉ、お姉様。私はそんな」
「誰です？　誰です？」
　五月雨までもが目を輝かせ、テーブルに手を突き身を乗り出して聞いてくる。
「だっ、駄目です！　これ以上は駄目！　下手したらクビになっちゃう！」
　そう言って比叡は慌てて立ち上がると、逃げるように扉の方へ向かって、
「それじゃあ、お二人共、ここの温泉は心地いいですよ！　是非、ゆっ

くり入ってきてください！」
と言い残して去っていった。
「あっ、逃げたぁ！」
五月雨の声を背中に、比叡は顔を赤くして受付へ戻った。三十六計逃げるにしかず、金剛の推理を逃れるにはこれが一番いい方法だった。

## 起こる悲劇

それから客が何人かやってきて、珍授荘は今日もすぐに満室となってしまった。特に今日は団体の客が宴会にやってくるから、夕方になると比叡は同僚の女中と共に宴会場の準備やら夕食の準備もしなければならない。その合間を縫って、客室で布団を敷いたりしなければならなかった。

また、今日は宴会の予約が事前に入っていたにも関わらずビールなどのお酒は、酒屋の事情で仕入れが遅れているようだった。比叡がやきもきして待っていると、なんとか五時半には到着した。女将の野々江にも手伝ってもらって、五ケース分の瓶ビールを業務用冷蔵庫へ入れると、比叡はほっと一息つくの束の間で、すぐに部屋へ夕食を配膳しなければならない。

ただ、また金剛と顔を合わせることが出来ることを考えると、体にいくぶん活力がみなぎってきた。

立ち上がって両手を握りしめ、気合いを入れなおす比叡を見て、女将は、

「さすが若い人は違うわ……」

と、感心したような呆れたような声を上げた。

さっきの会話は忘れてくれているといいけれど。

夕食の配膳盆を抱えて、比叡は金剛の部屋へ向かう。

「金剛様、夕食をお持ち致しました」

つい、いつもの癖で『様』を付けて声をかけてしまう。

「どうぞ」

という五月雨の声に、比叡は扉を開ける。

「何だ、比叡さんじゃないですか。余所行きの声だったから気づきませんでした」

五月雨が驚いたように言うと、金剛も、

「金剛様なんて水臭いネ」

と言った。二人とも浴衣姿で髪が濡れている。どうやらついさっきまでお風呂に入っていたようだった。

「いやぁ、つい癖で」
比叡がペコペコしながら言うと、金剛は微笑んで、
「冗談デース。比叡がちゃんと旅館の女中をしていて安心したネ」
「ははは……それじゃあ、ご夕食の説明に入らさせて頂きますね」
比叡がお品書きを説明し終えると、金剛と五月雨は、
「いただきまーす」
と、よっぽどお腹が空いていたのか食事にがっつき始める。
「もう、ゆっくり味わって食べて下さい。今日は料理長の市川さんが腕によりをかけて作ったんですからね」
「おいひいでふ」
五月雨がご飯を口いっぱいに頬張って言った。
「ああ、もうご飯粒がついてるわよ」
比叡が五月雨の口元についたご飯と取ってやった。
「そういえば、お姉様はどのくらいここへお泊りになられるのですか？」
五月雨から予約の連絡を受け取ったのは野々江だった。だから比叡は、金剛たちが泊まりに来るとは知っていても、詳細な宿泊日数までは知らなかった。
「だいたい五日を予定していマース」
「このところ、ずっと仕事でしたからね」
五月雨が言った。
「先生をのどかな場所でゆっくりと静養させてあげたいんです。実は先生、ちょっと前に過労で倒れてしまったんですよ」
「過労で倒れ、って！　大丈夫ですか？　お姉様！」
「心配することないネ比叡。ただちょっと四日くらい寝るのを忘れて考え事をしていて、ふっと目の前が暗くなって気が付いたらベッドの上にいただけヨ」
いや～、あれは驚いたデース、と笑いながら言う金剛に比叡は、何だか凄まじいものを感じた。
「すいません比叡さん。私が寝る前と、寝た後でずっと同じ姿勢を取っているからおかしいとは思ったんですが、まさか寝てないとは思

わなくて」
「同じ姿勢……」
関節とかバキバキになりそうなんですけど。
「まったく、ちょっと目を離すとすぐそうなんだから」
「ちょっと目を離すとすぐ……」
すぐ四日ぐらい不眠不休で考え事を？
比叡の知る金剛は、それはとても頭が良くて変わってはいるが、鎮守府にいたときはそこまでの無茶はしなかった。
自分のように、探偵と言う職業もまた、お姉様を変えていったのかしら？
「五月雨ちゃん！」
比叡は五月雨の肩を掴んでガクガクと前後に揺すりながら、
「お姉様をお願いね！」
「はわわわわ、大丈夫ですよ。最近は私がちゃんと先生が寝ているかどうかを確かめてから、寝ているようにしてますんで～」
五月雨がそう言うと、金剛は、
「うふふふふ」
と、怪しい笑みを浮かべて、
「ベッドに入って目を瞑ってるだけで、本当にこの私が寝ていると思って――――」
しかし比叡がキッと睨みつけると、そのまま押し黙ってしまった。
八時を過ぎて、比叡は宴会場へ料理やお酒を運んだり、客室のお膳を下げたりしていた。この峠を越えれば、今日の仕事はおしまいになる。あとは宴会場の片づけが残っていた。あらかた料理もお酒も運んでしまったから、宴会の終わる九時ごろまでは一息つけるだろう。
最後の料理を運び終えた比叡がロビーに戻ると、野々江が電話で話しているのが見えた。どうやら宴会場の客を送迎するためにバス会社へ連絡を取っているらしかった。
野々江はロビーの比叡を見つけると、
「ああ、比叡。丁度良かったわ。一番の部屋に日本酒を徳利で、十番の部屋にビールを持って行って差し上げて」

「はい、わかりました」
一番と十番か、金剛お姉様の部屋と、日暮様の部屋ね。
はぁ、とため息を吐いて比叡は調理場から日本酒の入った徳利とビール、それから瓶を開けるための栓抜きを取って、まずは金剛の部屋へと向かった。
「金剛様、お酒をお持ち致しました」
比叡がそう言って部屋へ入ると、
「わぁ、ヒエーさんだぁ」
と、既に顔を赤くして出来上がった五月雨が畳の上を転がっていた。浴衣がめくれ上がって、白いパンツが丸出しとなっている。
「駆逐艦五月雨、抜錨しま～す」
そういって五月雨はご機嫌な表示で畳の上を這った。テーブルの上には既に空となったビール瓶が二つ転がっている。
「さ、五月雨ちゃん！」
比叡が驚くと、
「あー、五月雨？　ここは陸地ネ？」
畳の上を這いまわる五月雨を、金剛が羽交い絞めするように抱え上げて座布団へ座らせた。
「えへへ～間違えちゃいました～」
「あーソーリー、比叡。五月雨ってば、酔っ払うとすぐこうなるネ。ああ、お酒はそこへ置いといてヨ」
「駄目です」
比叡が徳利を隠すと、
「ノー、比叡。五月雨には飲ませまセーン。それは私の分デース」
比叡はしばらくジッと金剛を睨んでいたが、
「もう、飲み過ぎないで下さいよ」
と、渋々とテーブルの上に徳利を置いた。
「ヒエーさーん、私と飲みましょうよぉ」
五月雨は再び座布団から這うように比叡に近づいてくる。その様子は軟体動物を連想させて滑稽であった。
「駄目よ、私はこれから十番の部屋のお客様にビールをお持ちしなけ

ればならないんだから。お姉様も、ほどほどにしてくださいな」
比叡は空いたビール瓶を下げて、次に日暮の部屋へ向かった。日暮の部屋の前には、既に二本ほど空になったビール瓶とその蓋が置かれていた。金剛の部屋に置いてあったビール瓶をその脇に置いて、
「日暮様、ビールをお持ち致しました」
比叡が呼びかけると、
「いいぞぉ、入れぇ！」
機嫌のいい声が襖の向こうから聞こえてきた。
比叡が襖を開けると、テーブルの傍に座りながら煙草を吸う日暮がいた。
「もう無くなっちまったぞ～」
空っぽのコップを振りながら、日暮が言った。
「はい、ただいま」
比叡は襖を閉めて部屋へ上がり、ビールの栓を抜いて日暮の持つコップに注ぐ。
「いやぁ、今日は暑いからビールがおいしいよ」
日暮はそう言って、泡立つビールを美味そうに口へ運んだ。
「あまり飲み過ぎないでください」
営業スマイルを全開にする比叡であったが、日暮の醸し出すどこかねっとりとした妖気に口角を引きつらせた。テーブルには既に誰かが持ってきていた栓抜きがあった。比叡は持ってきた栓抜を握ったまま、ビール瓶をテーブルの上に置いて部屋を出ようと立ち上がった。
すると、
「何だよう、もう行くのかい」
日暮が比叡の着物の裾を掴んだ。
「ヒエッ！」
突然のことでバランスを崩す比叡だったが、何とかたたらを踏んで踏みとどまる。手にしていた栓抜きが、ゴトンと畳の上に落ちた。
「もうちょっとゆっくりしていけよう」
比叡の腰回りに日暮が抱き着いた。

「やめて下さい！」
比叡がそれを突き飛ばした。
「あだっ！」
畳の上に尻もちをつく日暮。しかしすぐに仄暗い情念を目に宿らせて、比叡を睨みつけた。酒が回っているせいか、元々そう言う性質なのか、自分の思い通りに行かないとすぐに癇癪を起す彼の幼児性が、火山から噴き出すマグマのように噴出した。
「このアマ！」
「きゃあ！」
比叡に飛びかかる日暮であったが、肥満体の体格から来る鈍重な動きに、彼女はひらりと身をかわす。そしてついに二者はテーブルを挟んでジリジリと回りながら、動物のように睨み合うこととなった。
だがいつまでもこんなことはしていられない。
比叡は、今では日暮の後ろになってしまった、出口の襖を見る。このままテーブルを回って外に出て、誰かに助けてもらおうと考えた。
そのとき、日暮がテーブルを踏んで、一直線に比叡に飛びかかった。
「うがあ！」
「ひえええ！」
日暮に組みつかれる比叡だったが、とっさに艦娘時代に習得した格闘術を発揮して、両手で頭を押さえて引きはがし、足を払った。技は上手く決まった。しかし場所が悪かった。日暮の軸足はこのときテーブルの奥に敷かれた布団を踏んでいたのだが、比叡に足を払われてそれが勢いよく滑ったのだ。
結果、日暮はその巨体を大きく空中で回転させ、ドカンと大きな音を立ててテーブルの角に頭を打ち付け、ゴロンと転がって畳の上にうつ伏せとなった。
比叡はほんの数秒間、日暮へ技をかけた体勢で固まっていた。やがて日暮が一向に動き出さない日暮を見て、
「ちょっと、日暮さん」
と、声をかけた。
「日暮さん？」

肩を揺すってみたが、返事がない。やがて首筋から血が垂れてくるのが見えた。
「ひっ！」
悲鳴は短く悲鳴を上げて布団の上に尻もちをつき、後退った。
どうしよう、どうしよう、どうしよう。
「ねえ、ちょっと！」
殺しちゃった、殺しちゃった、殺しちゃった！
「おーい！」
そこで比叡は部屋の外から聞こえてくる声に気が付いた。
「何をどんちゃかやってるんだ。うるさいぞ！」
比叡は立ち上がって素早く着物を直し、部屋を出て日暮の死体が見えないように障子をしめると、何食わぬ顔で部屋を出た。そこには三十代くらいの男が、憮然とした表情で立っていたが、比叡の姿を見ると意外そうな顔をした。
「申し訳ありません。どうも悪酔いしてしまったようで、今しがた静かにさせたところです」
すると男は、
「そうですか。酒癖の悪い奴はどこにもいるもんだ」
と、腕組みした。
「そうだ、君、ちょうどいいところにいて下さった。これからうちのおふくろを、風呂に入れてやろうと思っていてね。ちょっと手伝いを頼めませんかね？」
「え？」
「何せうちのおふくろは最近、ちょいと足が悪くてね。それでここへ湯治に来たんだよ。何でもここの温泉は足によく効くっていうじゃないか」
確かに珍授荘の温泉は、足にいいと近所からも温泉だけ入りに来る客が多かった。特に露天風呂は混浴となっており、男の人が年老いた両親を介助しながら入ることが出来た。
「はぁ」
と、比叡が生返事をすると、

「別に風呂まで来て欲しいとはいいませんよ。階段のとこまでいいから。いやね、本当は一階の部屋が良かったんだけど満室って言うじゃありませんか。あんたのとこの女将さんだって、階段を使うときは遠慮なく申し付けて下さいと言ってたし……」
ど、どうしよう。
比叡の脳裏に、部屋でうつ伏せに倒れた日暮の姿が浮かんだ。あれを放っておいて、この人に付き合ってもいいのだろうか？　仕事があるので代わりの者を寄越しますと誤魔化そうか？　いや、それで再びこの部屋に戻るのも不自然だ。だけど隠したところでどうなるの？
ああ、どうしよう、どうしよう！
「わかりました」
比叡は笑顔で男へ返事をした。自分でもびっくりするくらいに自然な声だった。
「ありがとうございます。おっかぁ！」
男が呼ぶと襖が開いて、少し腰の曲がった老女が風呂敷包みを手に、杖を突きながらゆっくりと部屋から出てきた。その首には旅館の名前が刺繍された手拭いがかかっている。
「聞こえてるよぉ、まったく」
「荷物は俺が持つから」
男が襖を閉めて、老女に言った。すると老女は男に杖を差し出した。
「杖じゃないよ、風呂敷だよ」
そう言うと老女は、
「ふぉっ、ふぉっ、ふぉっ」
と笑った。どうも彼女なりの冗談らしい。
男と共に、比叡は老女を支えて階段を下りる。
「ありがとうございました」
男が頭を下げる。比叡は両手を振って、
「いいえ、いいんですよぉ。一階の部屋を用意できなかった私たちが悪いんだし」
「おっほっほっ、よく見ると別嬪さんやなぁ。どれ？　うちの息子の

嫁に来てくれんか？」
老女が言うと、比叡は顔を赤くして、
「い、いえ、私は！」
「おっかぁ、俺はもう結婚してっから！」
男が慌てて言うと、老女は、
「そうけぇ？」
と、首を傾げる。
「一緒に家に住んでるだろぉ？」
「じゃあなんでここにはいねぇんだ？」
「親父さんが危篤で実家へ帰ってんだろぉ？」
「そうだったけ？　そうだったかもしらん。そんじゃ、女中さん、孫の嫁にでも――」
「孫は娘しかおらんだろぉ！」
「たはは……じゃあ、私はこれで」
さすがに苦笑しながら、比叡は逃げるように階段を上って二階へ向かった。
でも、二階にはあの死体がある。
それでも、今一度、現実と向き合うように比叡は再び日暮の部屋の襖を開いた。部屋へ続く障子を開けると、そこには宗助が立っていた。
「はうっ！」
比叡は驚いて口元を押さえる。
「比叡ちゃん、これは……」
「違う、違う、そんなんじゃないの。その人が酔っ払って飛びかかって来たから、私、私、突き飛ばしちゃって」
比叡が崩れ落ちる。宗助は彼女に近づいて、優しく抱きしめた。
「分かってる」
「殺す、殺っ、殺すなんて、うう……」
比叡は宗助の胸に顔を埋めて泣き始めた。その間、宗助は比叡の髪に頭を埋め、背中を優しく撫で続けた。
しばらく泣き続けた比叡は、多少、落ち着いてきて宗助の胸から顔

を離し、
「私、警察に捕まるのかな？」
と訊ねた。
「いいや、捕まらないよ」
宗助は比叡のまつ毛に貯まった涙を人差し指で拭った。
「え？」
「誰も捕まらない。こんな奴のために、誰も捕まる必要なんか無いんだ」
「何を言っているの？」
比叡が宗助の顔を見上げて言った。
「死体を階段のところへ運ぶんだ。事故に見せかければいい。酔っ払って、階段を踏み外しようにするんだ」
「そんな！」
「じゃあ、君はこのまま警察に逮捕されてもいいのか？」
「それは……」
比叡は困ったように顔を伏せた。頭の中がグルグルと混乱していて、上手く考えがまとまらなかった。捕まりたくはない、だけどそんなことをして許されるのか？　ばれたら余計に罪が重くなるのではないか？　しかしここで捕まれば、今までの生活を手放さなければならなくなる。きっとこの旅館ではっもう働かせてもらえなくなるし、宗助とも会えなくなる。きっと金剛も自分のことを軽蔑するだろう。
するとそのとき、
「ヒエー、ヒエー！」
バンバンバン、と誰かが部屋の襖を叩いた。
「いるなら返事をするデース！　ヒエー！」
金剛お姉様！　え？　いや、何で？
比叡が混乱している一方、宗助の行動は素早かった。
「比叡、死体を広縁の椅子に座らせるんだ！」
宗助は死体を仰向けにして、両脇の下に手を差し入れた。
「ほら、足を持って！」
「ヒエー！　入るヨ？　ヒエー？」

「ちょっ、もう少しお待ちくださいお姉様！」
急いで比叡もテーブルを回り込んで日暮の足を掴んだ。
日暮の肥満体は二人がかりでも相当な重量があった。それでも何とか広縁の椅子に座らせた。
「それで、宗助さんは？」
「僕はここに隠れているよ」
と、宗助は障子をずらして死体の頭と自分の姿を見えないようにした。
あとは何かあるかしら？
比叡が周りを見渡すと、テーブルの隅に日暮の血痕が付いているのが見えた。
「ヒエー、もういいネ？　入るヨ？」
「ちょっと！」
金剛が日暮の部屋に入るのと、比叡が長押にかかったハンガーから濡れた手拭いを取るのはほとんど同時だった。
「ヒエー！」
金剛が部屋に入ってくる。
「ちょっとお姉様、他のお客さんのところに入ってこないで下さい！」
手拭いで血痕を拭きながら、比叡が注意した。
「うーん」
金剛は立っているのもどこかおぼつかなく、右へ左へフラフラしている。だいぶ酔いが回っているようだ。ここへ来たのもそのせいだろう。
「ヒエーさーん、えへへへ」
廊下の向こうでは五月雨が四つん這いで笑顔になっているのが見えた。
最悪だ。
「す、すみません日暮様」
自分が落ち着くためにも、比叡はまるで生きているかのように広縁にいる日暮の死体に謝罪した。すると、日暮の右手が「気にしてないさ」というように動くではないか。比叡は一瞬、ドキリとしたが何と

言うことは無い。宗助が機転を利かせて動かしたのだ。
あらかた血痕を拭き終えた比叡は、手拭いを血が見えないように畳んでテーブルの下へ置いて立ち上がり、
「ほらほら、外へ出て」
と、酔っ払った金剛を廊下の向こうへ押しやった。
「まったく、いったい何の用ですか？　御用がおありでしたら、受付までお願いします！」
「ヒエーと一緒にお酒が飲みたいデース！」
金剛がそう言って比叡にしだれかかった。吐く息がアルコール臭い。
「私はまだ仕事中です！」
そう言って比叡は金剛の額を軽くチョップした。
「あたっ」
「金剛、ブリッジに被弾！　五月雨、援護射撃に入りまーす！」
そう言って床を這いつくばる五月雨が、比叡の足首をぺちぺちと叩いた。
「いい加減にしなさい！」
比叡は割と本気で五月雨の頭頂にチョップを叩き込んだ。
「あでっ」
「とにかくお二人とも、部屋に帰ってもらいます！　酔いが冷めるまで部屋からでちゃ駄目ですよ！」
比叡はそう言うと、酔っ払って立てないでいる五月雨を背負い、金剛の手を引いて一番の部屋へ行き、二人をそれぞれの布団へ寝かせた。比叡が先ほど運んだ日本酒は既に空っぽになっていた。
酔いが回りに回ったのか、二人は布団の上ですっかりおとなしくなっている。
まぁ、しばらくは大丈夫でしょう。
比叡は空になった日本酒の瓶を引き取って、裏口の方へ向かった。すると玄関口の方で、野々江と担当の女中がが宴会場の客を送り出しているのが見えた。比叡も若い男と目が合うと、にっこり笑って会釈をした。それだけで若い男は得をしたような顔になって、同僚らしい

男に引きずられながら玄関口の方へ向かって行った。
　裏口のケースへ空になった日本酒を置き、比叡は再び日暮の部屋へ戻る。
「宗助さん？　いる？」
　比叡が呼びかけると、
「いるに決まっているとも。随分と遅かったじゃないか」
　宗助が広縁の障子から姿を現した。日暮の死体もまだ椅子に乗っかったままだ。
「あの二人は？」
「部屋へ送りました。大丈夫だと思います」
　宗助は額の汗を拭いながらふぅ、と息を吐いて、
「君も酔っ払ったあんな風になるのかい？」
「まさか……」
　比叡の言葉には自信が無かった。
「まぁいい。こいつをさっさと階段の下へ運んでしまおう」
　そう言って宗助は日暮の両脇に両手を挟んで抱え上げる。
「ほら、足を持って」
「うん」
　比叡が日暮の足を掴む。二度目だからあまり抵抗は感じなかった。夏場だからだろうか、日暮の体にはまだ温もりが残っているように思える。
　宗助を先頭に、出入り口の襖へと進む。
「ちょっと待ってくれ。人が来ないか確かめてくる」
　宗助が死体を置いて、入口の襖から首を出して廊下を覗き込んだ。
「よし、大丈夫そうだ。ここから素早くだぞ」
　比叡たちは死体を抱えて左手の、露天風呂へと続く階段を降りる。
「よし、ここでいい」
　踊り場のところで宗助と比叡は位置を変え、死体の足が下を向くように置いた。宗助は丁寧に後頭部の傷と、階段の角を合わせる。それから転落したらしくみせるために、浴衣の裾をそれっぽくはだけさせた。

「よし、誰にも見つからない内にここを離れよう」
宗助は比叡の手を引いて、二階へ上がった。周囲に人の気配はない。
「君が金剛さんを部屋に案内している間に、部屋は片づけて置いた。証拠はこれぐらいなもんさ」
そう言って宗助は浴衣の袖から丸まった手拭いを取り出した。比叡が日暮の血痕を拭いたものだった。
比叡は宗助の言葉を上の空で聞いていた。だが、日暮の部屋の前を通り過ぎようとしたとき、
「いけない」
ビール瓶の空き瓶を回収する。
「そうだね、君は日暮様の部屋に来たんだから」
宗助は頷いて、
「ここからはいったん、別行動を取ろう。なるべく、あの階段には近づかないように。第一発見者は怪しまれるっていうし」
「手拭いはどうするんです?」
「焼却炉に放り込んでおくさ。もし……まずないとは思うけど、紛失した理由を聞かれたら、日暮さんが粗相したものを拭いたのでそのまま捨てたと答えればいい」
それから宗助は事務室へ、比叡は空のビール瓶を裏口の捨て場へ運び、何食わぬ顔で宴会場の片づけへ合流した。
日暮の死体が見つかったのは、それから三十分後のことであった。

## 矛盾する死体

「それで、発見したのはあんたかね」
角刈りの、背広を着た年配刑事が、先ほど比叡が会った男に質問した。
「はい」
「私も一緒に見つけたよ」
隣にいる老女も言った。すると刑事は努めて優しい声で、
「お母さん、お母さんは部屋の方で待っていてください」
「息子は犯人じゃないよ。きっとあの人は階段で滑って頭を打ったんだ。私も階段からあんな風に落ちたことがあるから分かるんだ」
「ええ、分かってます。別に息子さんを逮捕しようってわけじゃありませんよ。これも事務処理上の問題でね、ちょっと話を聞くだけなんです。すぐに済みますから。誰か、この方を部屋までお連れしてあげてくれ」
「あっ、はい！」
宿泊客や同僚と、遠巻きに様子を見ていた比叡が手を挙げた。人垣をかき分けて、老女の手を掴む。それから近くの階段を上ろうとして、
「ああ、そっちはまだ現場検証中だ。すまんが向こう側の階段を使ってくれ」
刑事が受付近くの階段を指さす。
「はぁ」
比叡が踊り場の方を向くと、制服を着た警官が写真を撮っているのが見えた。
救急車の到着も遅れていると聞いたし、まだ死体はあそこにあるのだろうか？
そう思った途端、比叡は死体を運んだときの生々しい感触を思い出して急に吐き気がしてきた。老女の手を引いて、人垣の中へ埋もれようとしたとき、
「おい、あんた！　勝手に入って来ちゃだめだよ！」

という警官の声と、
「むーん！」
という聞き覚えのある唸り声が聞こえた。
「何だ何だ、一体どうした」
刑事が階段を上る。比叡も老女の手を放して後に続いた。すると踊り場では、かけ布が半分捲られた日暮の死体と、警官に羽交い絞めにされる金剛の姿があった。
「何だこいつは？」
飽きれたように刑事が言うと、
「すいません、私の姉の金剛です」
と、比叡が頭を下げた。
刑事は怪訝な顔をして、
「従業員なのかね？」
「いえ、私の家族で今日は客として来ています。まだ酔っているんでしょう」
「ふん、何だかわからんが、関係がないなら出て行ってもらおう」
「はい、私がさっきのお母さんと一緒に部屋へ送ります」
「頼むよ」
比叡と刑事がそんなやり取りをしていると、
「ちょっと待つデース！」
羽交い絞めする警官を振りほどき、金剛はやはりまだ酒が残っているのか、フラフラとした足取りで刑事へ向かってくる。
「えーと、あなた――――」
「大取警部です」
刑事は襟を正して言った。
「大取警部、先ほど下の会話を小耳に挟みマシたが、あなたはこの事件を事故だと考えていらっしゃるのデスカ？」
「それ以外、考えられないじゃないか。あんたには分かんないだろうがね。警察には警察のやり方と言うものがあるんだ。まず下の第一発見者は、八時五十分ごろにあんたの妹と一緒にお母さんを階段から下ろしてる。そこにいる日暮さんは、下の親子が風呂から出た九時ニ

十分の間にこけて死んだんだ。その間、この旅館にいるほとんど全員にアリバイがある。従業員は仕事で宴会場の片づけや、料理の後始末、事務仕事。宿泊者はほとんど全員が風呂に入っているか、部屋で遊ぶか話すか、あとは寝ているかだ。下の部屋の住人は、争う物音さえ聞いておらんのだぞ」
　そう聞くと金剛は、
「ははぁ」
　と、したり顔をして、
「失礼デスガ、オオトリ警部は極めて基本的な事実を見落としていマース」
「何だと？」
　大取警部はあからさまに不機嫌な態度を取って、
「なら行ってみたまえ。我々が何を見落としたと言うんだ」
　すると金剛は日暮の死体を指さし、
「いったい、この人はどこへ行こうとしていたんでしょう？」
「はぁ？」
　大取警部は心底どうでもいいように、
「風呂じゃないかね？」
「だとすれば着替えや、せめて手拭いを持って行くはずデース。現場からは見つかりましたネ？」
　大取警部が現場にいる警官に目配せする。警官は首を横に振って、
「いいえ、見つかってません」
「ならトイレだろう」
「トイレは二階にもありマース」
「だったら誰かが入っていたとか……」
「それなら余計におかしいデース。トイレは二階も一階も中央部にありマース。また、受付の近くにもありマース。私だったら遠回りせずに、受付近くの階段を使うデース」
「ふむ」
　ついに大取警部は口元に手を当てて考え込んでしまった。
「最後に」

金剛はその場からジャンプして、踊り場に飛び込んだ。
「こらっ！」
思わず大取警部が怒鳴った。金剛が踊場へ着地すると、ドカン、という大きな音が響いた。
「何をするかね！」
「オオトリ警部も聞いたデショー。すごい音がしたデース。私の体重が五十キロでここまで大きな音が出るのデスから、太ったヒグラシ＝サンが階段で倒れればもっと大きな音が出ると思いマース。それを下の部屋の人が聞かなかったのはおかしいデース！」
すると階段の下から年配の女性が、
「何ですか、今の音は？」
と訊ねる声が聞こえた。
「すると、いったい君は何が言いたいのかね？」
大取警部が訊ねると、金剛は得意げな顔で、
「ヒグラシ＝サンは転んで死んだのではありまセーン。殺された後、事故に見せかけるためにここへ運ばれたのデース！」
と答えた。
比叡は今更ながら比叡は痛感した。敬愛する姉が、とてつもない名探偵であることを。

# 消えた三品①

昨晩は一睡も眠れそうにないと思ったが、実際には午前二時くらいになるとウトウトしだして、結局は五時時まで眠ってしまった。比叡は今朝も六時に旅館近くの寮から着替えて出勤し、いつも通り朝食の配膳を行うのだった。

ただ、昨夜はあんな事故があったので、縁起が悪いと朝食も食べずに早々と旅館を出て行ったり、ゆっくり眠りたいから遅めでお願いしたいという客もあって、六時から朝食を食べようとする客は少なかった。

その少ない客の一人が、金剛である。

「いやぁ、旅先でこんな事件に出会えるとは思えなかったヨ」

昨夜の醜態はどこへやら、今や金剛は活気に満ち溢れ、食欲も旺盛である。

一方、五月雨は無理やり金剛にたたき起こされたのか、眠そうな目で、箸を動かしながら、ネズミの食事みたいに口を小さくモグモグとさせていた。

「大丈夫、五月雨ちゃん？　昨日はだいぶ酔っ払っていたけれど」

比叡がご飯のお替りを金剛に手渡して言った。

「調子に乗って飲みすぎちゃいました。頭が痛いですぅ」

「二日酔いね。五月雨も、それからお姉様も、今日はお酒はよしなさいな」

「酒なんか飲んでられないヨ！　事件が起こったんだらネ！」

鮎の塩焼きを食べながら金剛が言った。

「でも、別に誰からも依頼されているわけじゃ無いでしょう？　警察だって迷惑がっていたじゃない」

「なーに、これは趣味みたいなもんネ。それに比叡の働いている旅館で殺人なんて許せないデース。犯人は必ず捕まえてやりマース」

その言葉に比叡はドキリとした。金剛は、今自分の目の前にいる妹が犯人だと知ったらどう思うのだろうか？　やはり上機嫌に、比叡を追求するのだろうか？

いや、そうは思えない。金剛お姉様は私のことを愛してくださっている。
比叡はそう思うのだけれど、真犯人が自分とわかっても、それを見逃すとは思えなかった。金剛の正義感は、比叡もよく知るところだった。
「比叡?」
金剛に呼びかけられて、比叡はふと我に返る。
「どうしたネ比叡、ぼーっとして」
「あっ、いいえ、何でもありません。昨日はあんなことがあったからよく眠れなくて」
「オー、無理もありませーン。私もちょっと無神経デシタ」
と、金剛はすまなそうな顔をした。
「いいんです。ところで、お姉様にはもう犯人の目星がついていたりするんですか?」
比叡にしてみれば結構、思い切った質問だったが、金剛は軽く笑って、
「さすがにまだ分からないヨ。ヒグラシ=サンの人となりや人間関係も分からないし、どこで殺されたかもまだ分からないネ」
「そうですか」
「もしかすると、比叡にも手伝ってもらうことがあるかも知れないデース」
「それは……」
もちろんです、と言おうとして言葉に詰まる。
「先生、あまり比叡さんを困らせないで下さい。比叡さんには仕事がありますし、従業員というお立場もあるんですからね」
すかさず五月雨のフォローを受けて、比叡は内心ホッとした。
「それで、どうなさるおつもりですか?」
比叡が訊ねると、金剛は、
「ヒグラシ=サンの部屋は警察の方で今朝から現場検証に入るというし、差し当たって私は富山市内の観光をするつもりデース」
市内の観光と聞いて寝ぼけ眼だった五月雨がぱっと顔を輝かせた。

その様子に、比叡は何だか五月雨の苦労が偲ばれるようだった。
「旅館から市内行きのバスは九時ごろに到着しますから、それまで朝風呂にでも入られたらどうです？」
「そうするネ」
と、金剛は空になったお椀を見せて、三杯目のご飯を要求した。
「それで、金剛さんは市内へ向かったんだね？」
「はい」
金剛を見送って朝の仕事が終わると、比叡と宗助は昨日と同じように、例の池のそばで落ち合った。だがその雰囲気は昨日とは打って変わって、沈んだものだった。池の鯉ですら、宗助の姿を見ると水面にパクパクと口を開けて出てくるのに、今日は底の方へ引っ込んだままだった。
「話には聞いていたけれど、さすがに名探偵だね」
宗助がそう言って今日の分の餌を撒いた。それでようやく池の鯉が出てきて、パクパクと餌を啄んでいく。
「宗助さん。やっぱり、私、自首した方がいいと思うんです」
比叡が言うと、宗助は彼女の二の腕を掴んで、
「そんなの駄目だ！」
「でも、日暮さんへ最後に会ったのは私です。どの道、バレるのも時間の問題じゃないんですか？」
「大丈夫だよ。第一、金剛さんだって日暮が手を振っているのを見たじゃないか。彼女が帰ってから、君が日暮を殺して階段に運ぶなんて出来っこない。それにあの事件は事故みたいなもんなんだ。動機を調べても犯人は辿れないし、計画性が無いから僕に共犯の疑いがかかる可能性も低い。唯一の証拠である、血痕を拭った手拭いも焼却炉で全部、跡形もなく燃やしてしまったんだから」
「いいえ、宗助さんは何も分かってないわ。昔、戦争中だった頃、巡洋艦の川内さんが蒸発してしまった事件があったの。そのときだって、金剛お姉様は数少ない物証と関係者の証言から事件の真相を明らかにしてしまったのよ。今回の事件だってどうなるか。ねえ、本当に何か見落としは――――」

言い終わらない内に、宗助が片手で比叡を抱き寄せた。
「たとえ事件の真相が明るみになったとしても、君だけを逮捕させやしないさ。僕だって、立派な事後従犯なんだからね」
「宗助さん……」
比叡も宗助の背中へ手を回した。身長が比叡より少し低い宗助は、普段は何だか年下の弟のような感じがした。だけれど、このときの宗助は、確かに自分の盾となって守ろうとしてくれているように比叡には思えた。
「先生〜、ちょっと休憩しましょうよぉ」
五月雨は麦わら帽子の位置を直していった。
空は多少、雲が出てきているものの、叩き付けるような暑い日差しを遮るまでとは行かなかった。旅館からバスで三十分、市内に着いてからは一時間、五月雨と金剛はぶっ続けで聞き込みを続けながら歩き回っていた。目的地は昨日、旅館の階段にて遺体で発見された日暮恭平の家である。
「もう〜、市内観光とか言って結局はこれなんだから」
「しっかりするネ五月雨！　きっとあと少し、あと少しだヨ」
「そんなこと言っても、私、昨日はお酒を飲んでいたせいかあまりよく眠れてなくて」
「何言ってるネ。午後九時から午前六時までたっぷりと寝てたヨ」
富山駅前のバス停を降りて、駅員から交番、八百屋、薬局、次々と聞き回ってみたものの、
「知らないなぁ」
「知りません」
「ちょっと分かんないですね」
と返されるばかりだった。二日酔いで頭の痛い五月雨は、こんなことなら旅館でゆっくりと休んでおけばよかったと後悔した。
休む、そういえばこの度はゆっくり金剛を休ませるための旅だったはずだ。その金剛は、今や五月雨の目の前で音頭を取りながら生き生きと歩道を闊歩している。帽子もかぶらずにいるが、熱中症の気配すらなかった。

二人が商店の前を通りがかる。そこには氷水の入った桶で冷やされたラムネの瓶が、気持ちよさそうに水の中へ沈んでいた。水道の蛇口から出しっぱなしとなった水が、ジョボジョボと桶に降り注ぎ、溢れた水が道路へ出て、側溝へ伝って行くのが見えた。
「先生、ラムネですよラムネ！　休憩していきましょうよぉ！」
五月雨が金剛に抱き着いて、必死に懇願すると、金剛もため息を吐いて、
「したないネ、五月雨は」
と言って、財布を出し、店番をしている中年の女性に、
「すいませーん、ラムネを二瓶お願いするデース！」
「た、助かった」
そう言って五月雨は氷水の中へ両手を突っ込んで、ラムネを二瓶引き上げた。
「こちらに座ってもいいデスカ？」
金剛が店の中にあるテーブルと椅子を指して言うと、
「ええ、どうぞ」
と、女性が接客で掠れたらしい、ダミ声で返した。
「あんたたち、ここの人じゃないね？」
女性はそう訊ねながら天井の扇風機の電源を入れて、五月雨と金剛に風が来るようにしてやった。
「はい、東京から旅行に来ました」
五月雨が椅子に座っていった。中に入ってよく見てみると、ここはどうやら土産物屋のようだった。壁には料理のお品書きもあって、軽い食事もやっているらしい。
土産物は富山城由来の物品ばかりで変だなぁと五月雨が思って目の前の通りを見ると、堀を挟んで向こう側に富山城の白い城壁を見ることが出来た。暑い、暑いと下ばかり向いていてせいで、全く気が付かなかった。
五月雨はラムネの栓を開けて、富山城を肴にして飲んだ。炭酸を含んだ甘い汁が口いっぱいに広がって、音を立てながら喉へ落ち込んでいく。

ぷはぁ、と息を吐いたころにはだいぶ、気持ちが楽になっていた。
「あんたら、お城には行ったのかい？」
女性が訊ねると、五月雨が代表して首を横に振った。
「いいえ、まだです」
「だったら行ってくるといいよ」
「そのつもりデース」
金剛のその言葉に、五月雨は少しだけ希望を持った。
「ただし、その前に一つ行かなければならないところがありマース。この辺りにヒグラシと言う、大金持ちの家はないデスカー？」
「日暮ねぇ」
女性はそう言って少し考え込んだ後に、
「それってもしかして北島さんのお家のことかしら？」
「ん？　それはどういうことデース？」
「確かにこの辺りには昔、日暮ってお宅があってね。先代の旦那はよく出来た人だったけれど、今の代になって落ちぶれて行ってね。なんやかんやあって、債権も人の手に渡ってしまって、今の住所も妹の旦那さんのものになってしまって、自分はその敷地の隅に追いやられているって話じゃないか。まぁ、落ちぶれたとはいえ、贅沢をしなければ生きていられるだけの財産があるって聞いたけれど」
「そのヒグラシ家が、この辺りの旅館にお金か何かを話は聞いてませンカ？」
「さぁ、さすがに私もお金の貸し借りまでは聞いてないねぇ。昔は色々な商売に手を出していたとは聞いていたけれど」
女性は困ったように言うと、
「あんたたち、どうしてそんなことを訊くんだい？　日暮さんに何か用でもあるの？」
「実はヒグラシ＝サンが今、旅館で倒れて動けない状況なんデース。それで宿泊料が足りなくなってしまって、それでこうして私たちが市内観光をすると聞いて、家からお金を持ってくるように頼まれたのデース。しかしマヌケなことに住所を書いた紙を亡くしてしまってネ」

まぁた嘘ばっかり。
五月雨はやや呆れながら金剛と女性のやりとりをテーブルから見守った。
「普通、そういうのって妹とかに頼まないかい？」
女性が目を細めて言った。
「どうもその妹とは二日前に喧嘩をしてしまったと聞いていマース。妹の夫との関係も、あまり良好ではないそうじゃないデスカ」
「まぁ、確かにね。立場を考えたら、どっちにも頼みにくいか。ちょっと待ってな。今、地図を描いてやるからね」
そう言って女性は、手元の小さなメモ帳に地図を描き始めた。
日暮、もとい北島の邸宅はちょっとした武家屋敷然としたたたずまいをしていた。屋敷の周りは漆喰で固めた塀に囲まれていて、決して大きいわけではないが、歴史と品を感じさせた。門の前では丁度、黒い洋服を着た女性が打ち水をしているところだった。二十代後半くらいで、長い髪を団子状にして後ろでまとめていた。暑さのせいだろうか、気だるげな横顔はどことなく暗い陰を秘めていて、彼女の美しさを引き立てているように五月雨には思えた。
「ハロー！　ひょっとするとここヒグラシ＝サンのお宅では無いですか？」
金剛が質問すると、
「ええ、そうですが」
と、女性が警戒心を露わに答えた。
「私はこういうものデース」
金剛が女性に名刺を差し出した。
「戦艦探偵・金剛？」
「私は助手の五月雨って言います」
五月雨は頭を下げて、
「日暮さんの話はもう聞いていますか？」
と、問う。すると女性は、
「はい、昨日の晩に旅館の方から兄が階段で亡くなったと……」
「するとあなたは日暮さんの？」

「ええ、妹の北島加奈子と申します」
「それにしても、探偵さんがどうして兄の事件を調べていらっしゃるの？」
　加奈子が金剛と五月雨の前に麦茶を出しながら訊ねた。三人は、北島邸の中、和室の客間にいた。風通しがいいのか、客間は外の暑さに反して、不思議と涼しかった。開け放された縁側の向こうには、見事な日本庭園があったが、客間の暗さに対して日差しが強烈に眩しく、見ていると何だか目がチカチカするようだった。
「別に誰から依頼されたわけではありませーン。実は珍授荘で妹が女中として働いていまして、それでたまたま居合わせて、解決のお手伝いをしようと思っただけデース」
「まぁ、随分と妹思い出いらっしゃるのね」
「それほどでもありませーン」
　金剛はそう言って、照れたように頭をかいた。
「加奈子さん、お兄さんが珍授荘にお金を貸していたとか、そういうことはありませんでしたか？」
　五月雨が訊くと、加奈子は困ったような顔になって、
「実は先ほども、警察の方がここへやってきて、同じようなことを申されました。兄の死は事故ではないのですか？」
「今のところは何も言えませーン」
　金剛が答えた。
「しかし、お兄さんのご遺体には不自然な点がありマース。カナコ＝サン、お兄さんに対して恨みを持つ人に心当たりはありませンカ？」
　すると加奈子はため息を吐いて、
「さっきも警察の方に話したけれど、心当たりはありませんわ」
「でも、あまり言いたくはありませんが家の財産を食いつぶして、債権もほとんど人手に渡っていると聞いていますが……」
　五月雨が言った。
「確かに兄は、能力的には無能の部類に入るでしょう。でもそれだけです。傲慢で、わがままで、酒癖が悪いけれど、根は人見知りのする小心な人なのです。ちょっと脅かされただけで怯えて、縮こまるよう

な人なのです。ひんしゅくを買うこそあれ、人から殺されるほどの恨みを買うような人では決してございません」
　そう言って加奈子は不意に涙ぐんだ。
「すいません」
　そう言って、加奈子はハンカチを取り出して目元を拭いた。
「いえ、無理も無いデース……」
「私も、実のところ兄がそこまで好きじゃありませんでした。でも、不思議ですね。こうして死んだ後では、むしろ兄との良かった思い出が次々と思い出されるんです。確かに兄は人間としては、あまり優秀ではございませんでしたわ。だけれど、別にこんな風に死ななくとも良かったではありませんか。世間様に役立たなくとも、この家の片隅で、細々と生きて下さっていたら私はそれで良かったのに」
　そんな加奈子の様子を見ていると、五月雨までも胸が締め付けられるようで、釣られて涙が出てきた。一方、金剛は加奈子を気遣いながら、あくまで冷静に、
「カナコ＝サン。教えてください。お兄さんは珍授荘にお金などを貸していることはありませンカ？」
「ありません。珍授荘に対する貸し付けは、父の代に全て返済が終わっています」
「では、どうしてお兄さんは珍授荘へ行ったのデース？」
「わかりません。でも、ちょっと前までは、ちょくちょく遊びに行っていたと記憶しています」
「お兄さんが最近、お金に困っているようなことはありまセンカー？」
「お金の管理は夫がしています。頻度は、月に一回。でも、兄は夫と仲があまり良くないので、直接、渡すのは私からでした。でも、いつもすぐに使い切ってしまうのです」
「ナルホド、よく分かったデース」
　金剛は唐突に立ち上がって、
「サンキューデース。お邪魔したネ。私たちはこれで失礼するデース」
「え、先生？」

金剛が部屋を出ると、五月雨も急いで後に続いた。
「金剛さん！」
後ろから加奈子が叫んだ。
「兄は、兄はやはり誰かに殺されたのでしょうか？　いったい誰に？」
「もし、お兄さんが殺されたのナラ――――」
金剛はゆっくりと振り返って宣言する。
「私が必ず犯人を見つけマース！」
その後、金剛は五月雨の強い要望で富山城を見て回り、蕎麦を食べてから旅館へと帰った。

## 消えた三品②

既に日が傾きつつあった。旅先での時間の流れと言うものは、五月雨が驚くくらいに早かった。懐中時計を見ると、気分はまだ午前十一時だというのに、短針既に午後三時を指していた。

「結局、なんの手掛かりもありませんでしたね。殺人なら、かえって動機が分からなくなりました」

帰りのバスで五月雨がそう言うと、金剛は笑って、

「ノー、カナコ＝サンはやはり我々に重大な示俊を示してくれたネ。ヒグラシ＝サンと珍授荘の間には金の貸し借りは無かった、それにも関わらず彼が珍授荘へ行ったのは、きっとカナコ＝サンにも知らされていない、旅館の重大な秘密を握っていたに違いありまセーン」

「すると殺したのは旅館関係者だと？」

「ふむ、あるいは本当にただの事故と言う可能性もありマース。まだまだ捜査は始まったばかりだヨ、五月雨。安易に結論に飛びつくのはノー、何だからネ」

バスが旅館前のバス停へ辿り着く。金剛と五月雨が運賃を払って降りると、旅館の前にパトカーが止まっているのが見えた。聞き込みでもしているのだろうかと訝しむ五月雨をよそに、金剛は満足げな表情で、

「おっ、丁度いいところに来たネ」

と言った。よく見ると玄関先には、厳しい顔をした大取警部が座っていて、金剛と五月雨を見るとおもむろに立ち上がった。

金剛と五月雨、それから大取警部は、金剛たちの宿泊する一番のテーブルを挟んで向き合っていた。大取警部はあからさまに不機嫌な様子で警察手帳を捲る一方、金剛は涼しい顔で警部に微笑みかけている。

「先ほど女中をしているあんたの妹、えーと何て言ったかな？」

「比叡」

「そう、その比叡から聞いたんだがね。昨日の午後八時五十分から九時の間に、日暮の部屋に行ったそうじゃないか！」

言われて金剛は、
「ああ、言われてみれば確かにそうデース」
と言ったが、五月雨は、
あれ？　そうだっけ？
と無言で首を傾げた。
「そっちのお嬢さんはどうなんだね？」
大取警部が五月雨に矛先を向けると、五月雨は、
「う～ん、床を這いつくばっていたような記憶はあるんですけれど」
「まぁ、確かに比叡さんの証言では『五月雨、援護射撃に入りまーす！』とかなんとか言いながら、比叡さんの足首をペチペチと叩いたそうだが」
「わ、私、そんなことしましたかぁ！」
五月雨は恥ずかしさのあまり両手で顔を覆った。
「それで、どうなんだね」
大取警部がジロリと金剛を睨んだ。
「どうして被害者と最後に会ったことを、話さなんだね」
「確かに記憶はあるデース。比叡が私たちの部屋に日本酒を運び込んで、それから酔った勢いでヒグラシ＝サンの部屋へ行ったネ。でも正確な時刻までは記憶していないデース。夕食を食べた後だから、少なくとも七時以降であることは確かデスガ、八時五十分から九時という時間はいったいどこから分かったんデース？」
「隣に停まってた坂田という親子連れの証言だ。例の第一発見者だよ。彼はだいたい、いつもなら八時半ごろに母親を風呂に入れてやるんだそうだが、その日は疲れていたし、うっかりしていたようで時計を見ると八時五十分になっていたそうだ」
「ほう」
「そのとき、隣からドタバタと音がする。坂田の息子さんは、周りに迷惑だろうと思って注意しに行くと、出てきたのは女中の比叡さんだった。そこで比叡さんに手伝ってもらって、足腰の悪い母親を階段の下へ下ろした。それに五分くらい時間がかかった」
「そのとき、サカタ＝サンはヒグラシ＝サンの姿を？」

「ふむ、障子が閉まっていて姿は見ていないそうだ。そのとき、日暮さんはすっかり酔っ払って前後不覚になっていたらしくてね。客の醜態を見せまいという心遣いだなこりゃ。それから様子を見に再び日暮さんの部屋へ戻ると、ビールを少し零していたので、彼を広縁の椅子に座らせて、手拭いで拭いていたところに、君が現れたそうじゃないか。だから先ほどの坂田親子の話から食んだすると、その時間がだいたい八時五十五分から九時の間となるわけさ」
「でも、私がヒグラシ＝サンの部屋に入った時は障子戸が開いていて、広縁に座っていたヒグラシ＝サンが見えたデース」
「そりゃ突然、君が入ってくるのだもの。とにかく君は日暮さんが広縁に座って、意味へ手を振るのを、はっきりこの目でみたかね？そっちのお嬢さんは？」
　五月雨は昨日の夜のことを回想するが、やっぱり床の光景しか思い出せずに首を横に振った。
「確かにヒグラシ＝サンが手を振るのをはっきりとみたデース。それから比叡に連れられて部屋へ戻ったデース」
「つまり、少なくとも日暮さんの死亡推定時刻は、九時から坂田親子に発見される九時二十分の間と言うことになる。この二十分間に、日暮恭平を殺し、階段へ運んだとなると……」
「まさか、比叡さんを疑っているんですか！」
　五月雨が、打って変わってテーブルに身を乗り出して大取警部に詰め寄った。その迫力にいささか大取警部もタジタジになって、
「いや、あくまで可能性の話だよ。私と部下が聞き込みをしたところ、その時間にアリバイが無かったのは、女将の息子の敷島宗助と、そちらの比叡さんだけだったからね。私も別に比叡さんが犯人だと思っちゃいないよ。たった二十分の間に酔っ払っていたとはいえ、日暮さんを叩き殺し、あの肥満体を階段へ運ぶなんて、女手一つで出来るもんじゃない。第一、動機がないじゃないか」
「じゃあ、宗助さんの方はどうなんです？」
　五月雨が問い詰めると、
「こっちの方もだね、八時五十分前に実は二階へ行っていたそうなん

だよ。当時、受付をしていた井上という女中がその姿を見ている。何でも、女将さんが伝票を持って行ってしまって、それを追いかけたらしいね」
「女将さんはどうして二階へ？」
「何でも日暮さんと何か話があったらしい。昔からの常連だから、積もる話もあったのだろう。ところが泥酔して暴れ回っているから話しどころじゃない。そこで、後からやって来た息子に様子を見るように言って、自分は再び一階へ戻った。宗助の方はそのまま酔っ払った日暮さんの介抱をして、比叡さんが坂田さんの母親を一階へ下ろした後で、部屋を出て旅館裏で九時五分ごろまで一服していたそうだ。だから八時五十分から九時五分までのアリバイを証明するものは比叡の証言以外にない。だが彼が犯人だとしても、比叡さんに見られずに日暮さんの部屋に入って、彼を叩き殺し、階段に放置するのは難しいだろう。昼間、被害者の家で妹さんの、加奈子という人に話を伺ったが、確かに日暮家はこの旅館に金を貸していたそうだが、既に返済を終えている。日暮がたびたびここに来るのは、単に馴染みだからだろう。宗助にしたって、日暮さんを殺す動機が見当たらない」
「待っテ、オオトリ警部。被害者は『叩き殺された』のデスカ？」
「ああ、そうらしい。解剖の結果によると――――」
　そう言いながら大取警部は手帳を捲ろうとして、
「いやいや、何であんたにそんなことを教えなきゃならんのだ」
「まぁ、いいカラ」
「なんてな。実は今朝、警視庁にあんたのことを問い合わせたよ。容姿、風体、しゃべり方、そして助手の髪の青い娘。金剛さん、あんた東京ではかなりの名探偵だそうじゃないか」
「いやぁ、それほどでもナイネ」
　金剛が照れたように言いながら、ただでさえ大きな胸を張った。すると大取警部は、
「やれやれ」
　と、ため息を吐いて、
「警視庁はだいぶ、あんたのことを買っているよ。必要な情報はなん

でも与えてやれとのお達しだ。こういうのもなんだが、実際、私もよく分からなくなってしまってね」
「具体的にはどういう点デース？」
「うむ、実は解剖の結果なんだが、これがどうも妙なんだ。まず被害者は、最初に頭部を角材のようなもので横殴りにされている。だが、それでは死ななかったらしい」
「どうしてそんなことが言えるんです」
　五月雨が問うと、すかさず金剛が、
「指先の血痕ネ？」
　と言った。
「さすが、酔っていたとはいえ、よく見ているね」
　大取警部は感心したように言って、
「おそらく、指先の血痕は傷の具合を確かめようと触った時に付着したんだろう。だから被害者は最初の第一撃で死ななかったということが言える。その直後に、被害者は、今度は何か、小さい鉄板のようなもので殴られているらしい」
「小さい鉄板のようなもの？」
　五月雨に訊かれると、大取警部は頷いて、右手の掌を見せながら、
「だいたい片手で握れるほどの大きさで、厚さはせいぜい二、三ミリ程度。それを逆手へ持って、被害者の頭へ……」
　大取警部は拳を握りしめて振り下ろす真似をした。
「ガツン！　とやったわけですな」
「一体凶器は？」
「さぁ、それが皆目見当もつかん。金剛さんはどうだい」
「事件当時、ヒグラシ＝サンの部屋にあったものは分かりマスカー？」
「ええ、それならここにメモしてあります」
　と、大取警部は金剛へ手帳を開いて見せた。
「意外と几帳面ですねぇ」
　五月雨が言った。
「意外とは余計だよ、君。それで金剛さん。何か分かるかね？」
「うーん、さすがに現時点では難しいネ」

「やっぱりそうか」
　大取警部はそう言って立ち上がった。
「何か分かったら知らせてくれたまえ。それじゃ、私はこれで失礼するよ」
「オー、待ってくだサーイ。比叡が汚れを拭いたという手拭いはどうしましたカー？」
「他のゴミと一緒に、焼却炉で燃してしまったそうだ」
　と、言って、大取警部は金剛と五月雨の部屋を後にした。
　一方そのころ、調理場の隅では田島が、
「あれぇ？」
　としきりに首を傾げていた。そこへ比叡が、客の使った急須と湯飲みを持って入って来た。
「どうしましたか？　田島さん」
「うん、何だか栓抜きが一本足らないのよ」
「栓抜きですか？」
　比叡がそう言って、田島の手元を見た。田島は栓抜きの入った引き出しをガチャガチャと探りながら、一本一本、数を数えているようだった。
「やっぱり一本足らないわ。比叡ちゃん知らない？」
「うーん分からないですねぇ。もしかしたら昨日の宴会のお客さんが、間違って持っていったんじゃないですか？」
　すると田島は残念そうな顔をして、
「そうかもしれないわねぇ。ちょっとさび付いてきているのもあるし、この際だから何本か新調しちゃいましょうか」
「あら、何か無くなったの？」
　そこへ野々江が現れた。
「ええ、栓抜きが一本無くなっちゃんですよ。酔っ払われたお客さんに持って行かれちゃったのかしらって、今、比叡ちゃんと話していたところなんです。女将さんも何か失くしものですか？」
「そうなのよ。昨日、ビールを仕入れたでしょ？　そのときの伝票がどこを探しても無いのよねぇ。まぁ、伝票の一枚くらい、内容は覚え

ているから失くしてもどうと言うことは無いんだけれどねぇ。ああ、そうそう比叡ちゃん」
「はい、なんでしょう？」
「金剛さんの部屋から刑事さんが帰っていったから、お詫びにお茶菓子を出して差し上げて。それから冷たい麦茶も持って行きなさいな」
「はい、ただいま！」
元気よく返事をする比叡に微笑んで、
「じゃあ、よろしくね」
と、野々江は調理場を去った。
比叡は茶菓子とコップ、それから麦茶の入ったポットを盆に載せて金剛と五月雨の部屋へ向かった。見慣れた廊下を、比叡は歩いていく。事件が起こってまだ一日も経っていないというのに、比叡には昨日のことが何だか夢のように感じられた。
これは心の防衛機構なのだろうか？
それなら、その方がいいのかもしれないと比叡は思う。自分が『犯人ではない』と暗示をかけ続ければ、態度からボロ出す心配は無くなるかもしれない。
金剛の部屋へ辿り着く。あれから何か分かったのだろうか？　いいや、分かるはずがない。金剛と五月雨は今まで市内観光へ行っていたのだ。しかし、先ほど警察から何か聞いたかもしれない。
……こんなところでジッとしていれば、それこそ怪しまれる。
比叡は意を決して、襖の向こうへ呼びかけた。
「金剛様、いらっしゃいますか？」
「オー、比叡！　カモン！」
「失礼します」
比叡は襖を開けて中へ入る。いつも通り、金剛と五月雨の笑顔が比叡を迎えた。
「わぁ、比叡さん。何ですかそれ？」
五月雨が訊いた。
「女将さんからのお詫びよ。麦茶と茶菓子。今日は三角どら焼き」
そう言って、比叡は金剛と比叡に、皿に乗っかった三角形のどら焼

きを振舞い、湯飲みに麦茶を注いだ。
「どうだった？　市内観光は？　富山城には行ったのかしら？」
「それがですねぇ、先生ったら市内に着くなりずーっと日暮さんのお宅を探していたんですよぉ」
　五月雨の言葉に、比叡はドキリとした。しかし、日暮の生家を訊ねたところで、彼と自分には何の関係も無いことに気が付いて、比叡は内心ほっとした。昨日のあれは、ほとんど事故の様なものである。動機の線から自分を辿ることなど、出来るはずがない。
「あら、そうなの」
　比叡は平然とした調子で言葉を返す。
「何か収穫はあったのかしら？」
「それがですねぇ、全然ないんですよ。特に誰かから殺されるほどの恨みを買うような人でもないようです。それに日暮さんの家は、方々にお金を貸していて、この旅館にもお金を貸していたそうですが、それも戦前に返済し終えたそうです」
「え？　そうなの？　私はてっきりまたお金をせびりに来たのかと」
「以前にもヒグラシ＝サンがお金を無心しにきたことがあったネ？」
　金剛が訊いた。
「いえ、私は見たことがありませんけれど、田島という私と同じ女中をしている方が、戦前に何度も来るのを見たと言っていたのを聞いたので」
「ふむ、タジマ＝サンネ」
　金剛は口の中で呟くようにその名前を言った。
　後で話を聞きに行くつもりなのかしら。
　比叡はそう思って、
「田島さんに話を聞きに行くなら、あまり迷惑はかけないで下さいよ」
「ふふ、大丈夫デース」
　それじゃ、と比叡は立ち上がって、
「私は仕事の方に戻りますね」
「え～、もう少しゆっくりしていけばいいのに」
　五月雨が言うと、比叡は人差し指を立てて、

「駄目よ。私はこれでお給料を貰っているんだから」
と言って部屋から出て行った。

# 宗助のアリバイ

そこは日暮の泊まっていた十番の部屋だった。警察の鑑識班が証拠を集めて立ち去った今、部屋は元通り綺麗になっていた。それでも、やはり死んだ人の止まった部屋だから縁起が悪いということで、野々江は地元の神主を手配してお祓いをし、四十九日を過ぎるまで一般に開放しないことを決めていた。それまでここは開かずの間となる。

その開かずの間に、金剛と五月雨を始め、大取警部、宗助、野々江、それから比叡がいた。全員が、金剛と五月雨にここへ突然、呼び集められたのだ。

「いったい、こんなところへ皆さんを集めて何をなさるつもりです?」

野々江が戸惑いながら質問をすると、金剛は自信たっぷりな様子で腰に手を当て、

「犯人が分かったデース」

と宣言した。

「それはあなたネ!　比叡!」

「キャアアア!」

叫び声と共に、比叡は布団から跳ね起きた。

「ごめんなさい、ごめんなさいお姉様!」

そう言いながら周囲を見回す。そこは寮の自室だった。空も白んでいないのか、部屋は真っ暗だった。夏の夜の温い空気が、部屋の中へ漂っている。

夢?

比叡は額の汗を拭った。額だけではなく、全身が汗にまみれていた。心臓の鼓動が耳元で聞こえるまでに高鳴っている。

酷い悪夢だった。いや、あるいは正夢かもしれない。

布団の上で体育座りをして、膝頭に頭を埋めて呼吸を整える。

大丈夫、あれは夢だから。

落ち着き始めると、急に喉の渇きを感じた。枕元にある水差しからコップに水を注いで飲み干す。

「フゥー」
　完全に落ち着いてしまうと、汗にまみれた寝間着が気持ち悪かった。比叡は寝巻を脱ぎ捨てて下着姿になると、そのまま朝の訪れを待った。
　午前の仕事を終えると、比叡は宗助と共に旅館近くの、のどかな山道を散歩していた。もちろん、二人一緒に旅館を出ると怪しまれるので、それぞれ時間をずらし、別々な場所から旅館を出て、近くの地蔵がいる三叉路で落ち合った。天気はあいにくの曇り空だが、ここ二日続いた猛烈な日照りを思うと、かえって散歩日和と言えるだろう。
「大丈夫かい、比叡さん。休んだ方が……」
　宗助が比叡を気遣うように言った。同じような言葉を野々江や田島からも言われたが、比叡は頑として首を横に振って、
「いいんです。仕事をしていた方が、気が紛れるし」
「そう。何、大丈夫さ。警察も昨日、金剛さんへ話を聞きに来ただけで、僕たちには興味が無さそうだし。ところで、今日の金剛さんはどんな様子だい？」
「今日は一日中宿でゆっくりしていくそうです。お姉様、実は体調が思わしくなくて、ここへ来たのも元々は静養のためだそうです。昨日は無理して暑い中、街へ行ったから、調子をまた崩されたのでしょう」
「へぇ、意外だな。あの青い髪の女の子は？」
「今日も市内へ行きました。昨日は、お姉様の捜査に振り回されたから、今日こそ観光して回るんだと息巻いてましたよ」
　そう言って比叡が笑うと、宗助もホッとしたように微笑んだ。
「だったら、明日は山道の散策を提案したらどうだい。そうだ、川で釣りもいい。なんなら、母さんに行って僕たち四人で釣りとしゃれこもう。そういえば釣りなんて、復員してからやってないなぁ」
　話している内に、二人はやがて神社へ続く大きな石段の前へ来た。そこは数百年前から続く大きな神社で、地元のお祭りもよくそこで開催された。そういえば、もうすぐ夏祭りの時期である。珍授荘もスポンサーになっているから、一週間ほど前に神主さんが見えて挨拶をしに来たことを思い出した。

「ついでにお参りして行こう」
宗助が比叡を手を引くと、比叡はためらいの表情を見せた。境内に足を踏み入れると、何だか罰が当たりそうな気がしたからだ。比叡がそう言うと、宗助は笑って、
「大丈夫だよ。別に願をかけるつもりじゃない。ただちょっと寄るだけさ。夏祭りの打ち合わせで、神主様に少し話があるんだ」
曇り空の下とはいえ、石段は新緑の中に沈んで美しかった。蝉の声が木々の間にこだまし、やがて常願寺川へ合流するであろう山から流れるせせらぎが涼しげだった。とうとう比叡は気分転換に、と石段へ一歩を踏み出した。
神社は敷地面積も大きく、本殿もそれなりの大きさだったが、石段の下からはとんとその姿を窺い知ることは出来ない。この神社を訪れるのは、何も比叡にとって初めてでは無かった。祭りの季節になれば、他の女中と共に比叡も珍授荘を代表して手伝いに行かされた。だけれど、いつもこの石段を登るとき、最後の一段を上り切った先に漠然とした希望を感じた。
しかし、この日、石段の先に比叡を待っていたものは、遠く神社の賽銭箱の隣に腰を下ろす金剛だった。
「ハーイ！　二人共！」
金剛は立ち上がって両手を振りながら、よく通る声で二人へ呼びかけた。比叡と宗助はしばし呆然としながらも、やがて気を取り直して金剛の下へ向かって行った。
「金剛さん！　どうしたんです、こんなところで。体調を崩して宿で休まれているかと思いましたが」
まず宗助が質問した。
「別に体調を崩したというほどではないデース。ただちょっと疲れただけネ」
「お姉様いったい、どうしてここに？」
比叡が訊ねると、
「簡単なことデース。まず前提として、二人は付き合ってるネ？」
「ヒエッ」

比叡が顔を赤くして後退る。
「比叡は初日に『恋人は出来たか？』と聞かれて『駄目です、下手したら首になる』と答えたネ。そのことから比叡の恋人は旅館の従業員で、経営者の親族。つまりソウスケ＝サン以外にはありえまセーン。また、お二人はよく午前の仕事終わりに旅館裏手の池で会っているデース」
「見、見てたんですか！」
比叡が顔を赤くして起こったように言うと、金剛は首を横に振った。
「私は見ていないデース。でも気づかないネ？　旅館二階、トイレ脇の窓からは絶妙な角度で池の方が見渡せマース。珍授荘はよく掃除が行き届いた旅館ですが、そこの窓の一部分だけ妙に綺麗だったネ。つまりよく池の方を覗く人がいるということデース。では誰が覗いているのデショー？　旅館の裏手の藪の中に池があることを知っていて、その池の鯉にソウスケ＝サンがよく餌を撒いているのを知っている人間、また窓の磨かれた部分と身長の位置関係を考慮して女将のシキシマ・ノノエ＝サン以外にいまセーン。では、実の母親がどうして熱心に息子の鯉の餌やりを覗くネ？　そんなに息子を見守りたいなら隣に行けばいいデース。でも、やりまセーン。何故なら、秘密の恋人が隣にいつもいるからデース。ソウスケ＝サンは旅館の跡取り息子、何か間違いがあってはいけまセーン。だけど面と向かっては反抗されるし、何より覗いている自分に後ろめたさも感じていマース。旅館裏手は街灯も無いので夜になると真っ暗になり、三人とも繁忙期が重なることから、時間帯は恐らく午前の仕事終わりのわずかな時間。よって逆説的に、ソウスケ＝サンと比叡は午前の仕事が終わると、旅館裏手の池の前で逢引きを重ねていることが分かりマース」
「ヒッ、ヒエエエエエ～」
金剛の推理が終わると、比叡は珍妙な悲鳴を上げて膝から崩れ落ちた。
「そ、そ、そんな、い、い、いったいいつから」
「正確には分かりませんが、だいぶ前からだと思いマース……」

「ヒエ～」
「落ち着いて、比叡さん。母も知っていて黙っていたということは、ある程度、君を認めているということじゃにないか」
　宗助のフォローに金剛も同意して、
「その通りでデース。ま、いい機会だからこの際、三人で膝を突き合わせて話し合ってみるといいネ」
　まだ立ち直れていない比叡を他所に、宗助は不思議そうな顔で、
「しかし金剛さん。さっきも言いましたが、どうしてまたこんなところにいるんです？」
「あなたたちを待っていたデース」
「待っていたって、どうして僕たちがここに来ることが分かったんです？」
「ふむ、一般的に世を忍ぶカップルと言うものは、統計的に三日続けて同じ場所を逢引き場所に選びまセーン。またその際には、六十パーセント以上がパートナーとの散歩を選ぶデース。何故なら一カ所に留まる場合と比べて人目につきにくく、言い訳もしやすいからデース。旅館の周囲にはいくつか山道がありマスガ、この山道が一番、気が大きく生えていて人目につきにくいネ。そして今日は気温は低いが、湿度が少し高いデース。ちょうど道を歩いていて疲労してくるのが、この辺りデース。ということは、お二人はこの神社で一休みする可能性が高いと言えマース」
「はぁ」
　宗助が金剛の推理力に唖然としていると、金剛は舌を出して、
「というのは冗談デース。女将のノノエ＝サンが、ソウスケ＝サンにこの神社へ言伝を頼んだということを聞いたので、別な道から先回りしたネ。おかげでクタクタだよ」
「ああ、それで顔色が少し悪いんですね」
　宗助が苦笑して言うと、金剛も笑って頷いた。
「さて、金剛さん。私たちに何か用ですか？」
「イエス、ヒグラシ＝サンが死んだと思われる八時五十分から、九時二十分までどこにいたのかを教えてくだサーイ」

金剛の言葉に宗助は再び苦笑して、
「金剛さん、警察の話によれば日暮さんは九時から九時二十分の間に殺されたのでは？　確かあなたは、その直前に日暮さんを見ていらっしゃるはずです」
「ああ、それはうっかりしていたデース。どうもそのときは酷い酔い方をしてたマシタ。富山のお酒がおいしくてネー」
一見和やかに語り合う二人を、比叡は内心、戦々恐々とした気持ちで見つめていた。
死亡推定時刻の間違いはわざとだ。お姉様はカマをかけようとしている。
そう思った比叡は、下手なことは言うまいと、質問が来るまでひたすら聞き役に徹することにした。
「警察の話によれば、あなたは九時から九時二十分の間、旅館の裏手で煙草を吸っていたと言ったそうネ？」
「はい。証明するものはいませんが……」
「その前はどちらに？」
「事務室の方で伝票の整理をしていました」
「イエス、そしてそのあと二階へ上がった。当時、受付をしていたイノウエ＝サンという女中が証言していマース。ソウスケ＝サン、どうして二階へ？」
「母の後を追ったのですよ。実はあのとき、日暮さんと母との間で何か相談事があったらしくて。でも、母はそそっかしい人で、ビールを仕入れたときの伝票を持って上がってしまったんです。それを追いかけたのですよ」
「ノノエ＝サンも同じことを仰っていたデース。あなたが二階へ上がる少し前に、やはり受付のイノウエ＝サンが見ていマース。ところがヒグラシ＝サンが泥酔して暴れまっている音を聞いて、時間を置くために引き返したと言ってたデース」
「ええ、日暮さんの酒癖の悪さは昔からでしてね」
宗助は苦笑する。一方で、実はあのとき野々江が近くまで来ていたと知って、比叡は何だか冷や汗が出てきた。

「そこであなたは廊下でノノエ＝サンとすれ違った。ノノエ＝サンはヒグラシ＝サンが暴れているようなので、比叡の様子を見に行って欲しいと頼んだ。そしてあなたはヒグラシ＝サンの部屋に入ったネ。それは何時ごろデース？」
「多分、八時五十分前でしょう。僕は日暮さんを部屋の中で介抱し、比叡が坂田さんのお母様を一階へ下ろして、比叡と入れ替わりに部屋を露天風呂の方の階段から出て、旅館の裏手に回って少し煙草を吸いました。それで九時五分ごろにまた仕事へ戻ったんです。僕の姿は、母も井上さんも見ていますよ」
「ふむ、やはりそうデスカ」
　金剛は納得したように頷いた。傍から聞いている比叡にとっても、完璧な筋書きだ。
「比叡さん、仮に僕が犯人だとしても、どうやって五分で日暮さんを殺して、あの体を階段まで運べるんです？　ちょっと無理がありませんかね？」
「まぁ、一人では無理ネ」
　頭をかきながら金剛が言った。一人では無理、その言葉に比叡もそして宗助もドキリとしたに違いない。
「一人？　あなたまさか、僕と比叡さんが共犯だっておっしゃるんですか？」
　動揺を隠すためか、ひどく怒った様子で宗助が言うと、金剛は慌てて、
「ソ、ソーリー、まぁ、そういう可能性もあるという話デース。ああ、話はこれで終わりデース。私は旅館へ帰るデース」
　金剛は立ちあがって、それから右手の人差し指を立てて、
「ああ、もう一つだけ質問がありマース」
「何です？」
　落ち着いた様子で宗助が言った。
「結局、伝票は女将さんから受け取れマシタカー？」
　すると宗助は困ったように笑って腕を組んだ。
「それが、何故かどこを探しても無いんですよ。母もどこで失くした

か思い出せないらしくて、困ったものです」
「なるほどデース」
　金剛はそう言って去っていった。残された比叡と金剛は、気が付くとお互いの手と手を固く握りあっていた。
　五月雨が帰ってきたのは午後五時頃だった。金剛が部屋で本を読みながらくつろいでいると、
「ただいま帰りました！」
　と、勢いよく襖を開けて入って来た。五月雨はすっかり真っ赤になって日焼けしていた。手には衣服の入ったかごが下げられている。市内へ行くついでに、衣服のクリーニングも頼んだのだ。
「いったいどうしたネ五月雨。すっかり日焼けしているデース」
　旅館の近くは曇り空だったが、市街地の方は今日も快晴だったようだ。五月雨は照れた様子で、
「ええ、実はまず護国神社へお参りに行って、お守りを買った後で、市内の甘味を食べ歩いちゃいました。それでですね、ふふふ、護国神社のそばを流れている川あるじゃないですか、あれ神通川って言うんですって！」
「はぁ……」
「それでお昼を食べ終わって、神通川沿いに北へ歩いていくと、海水浴場があるじゃないですか。それで私、水着を買って泳いできたんです。すると溺れている子供が五人くらいいたので助けてあげました」
「それはいいとして、頼んだものはどうネ？」
「もちろんそれもバッチリですよ～。洗濯物をクリーニングに出した後、ちゃあんと図書館へ行って調べましたから」
　五月雨は荷物を置いて手帳を取り出した。
「この旅館の前の経営者である敷島宗一……つまり、今の女将さんである敷島野々江さんの旦那さんであり、宗助さんのお父様ですね。この人は一九三九年に失踪しています五月九日と、七月七日、それから十一月八日に新聞広告を出しています」
「ふむふむ」
「そのあと、また日暮――じゃない、北島さんのお宅を訪問して日暮

さんの部屋を調べました」
「それでどうだったネ？」
「ありましたよ」
そう言って五月雨は鞄から小汚いノートのようなものを取り出した。
「でかしたデース」
五月雨からノートを受け取り、金剛はパラパラをそれを捲った。
「それでは、五月雨に次の指示を出しマース。明日は手分けしてこの旅館から無くなった栓抜きを探すデース！」
「あ、それはちょっと無理かもしれません」
「ん？　どうしてデース？」
「いやぁ、何せ子供を五人も助けたので、消防署から表彰状を貰うことになりまして……」
「シーット！　そんなものキャンセルするデース！」
「そういうわけにも行きませんよ。新聞記者さんとかも来るんだし」
「キーッ！」
思わず金剛は頭をかきむしるのだった。

# 池の鯉

四日目の朝はあいにくの雨だった。五月雨は昨日言った通り、富山市内に表彰状を貰いに出かけ、金剛はシトシトと降る雨の中、傘をさして旅館の周りをウロウロしていた。そして時折、地面の色が変わっている場所を見つけると、しゃがみ込んでよくよく調べ、それからまた立ち上がって歩き始める。

「金剛さ～ん」

そんな金剛を呼び止める者があった。女将の野々江である。金剛が声のする方を向くと、野々江が旅館と露天風呂を結ぶ渡り廊下のひさしの下で手を振っているのが見えた。

「オー、ノノエ＝サン！」

金剛は水たまりをヒョイヒョイと避けながら野々江の方へやって来た。

「いったい、何をしてらしているのです？　散歩ですか？」

野々江は微笑みながら訊ねた。もう五十代に差し掛かろうという年齢にも関わらず、野々江には金剛でもはっとするような妖しい色気をたたえていた。それが雨の中ではいっそう、匂い立つようである。

「いえ、ちょっと探し物デース」

「あら？　何か落し物でもしたのかしら？」

「ノー、私が探しているのは事件当夜に消えたという栓抜きネ」

「せ、栓抜きを？」

野々江は少し驚いたように言った。

「いったいどうして？」

「事件当夜にこの旅館から消えたものが三つあるデース。一つは手拭い、二つ目は栓抜き、三つ目は伝票、私の考えでは、三つはヒグラシ＝サンの死に何らかの関わりを示していマース」

「手拭いって、ああ、日暮さんが粗相したものを拭いたものでしょう？」

「イエス！　まぁ、それは焼却炉で他のごみと一緒に灰になってしまったようデスガ……」

「まぁ、手拭いは分かるとしても栓抜きと伝票はどう関わってくるのかしら？　よかったらお聞かせ願えます？」
「もちろんデース！　実は事件当日、ヒグラシ＝サンの部屋には栓抜きが二つあったデース。最初の女中がビールを運んできたときに持ち込んだものと、比叡が追加でビールを持ってきたときの二つデース。比叡があの夜、日本酒を持ってきたときに私はしっかりと見たヨ。しかし警察の調べでは、事件後に部屋から発見された栓抜きは一つだけデース。だから消えた栓抜きはヒグラシ＝サンの部屋にあったものであり、かつ犯人が持ち去った可能性が高いデース！」
「あら、私はてっきり宴会場で酔っ払ったお客さんの誰かが持って帰ってしまったと思いましたわ。でも、どうして犯人が栓抜きなんか持ち去るのです？」
「それは見つけてみれば分かりマース」
「見つかるかしら？　もし、犯人が栓抜きを見つけられたくなければ、遠いどこかへ捨てているんじゃない？」
「うーん、それを言われると痛いデース……」
　金剛はそう言って困ったような顔をした。
「それに、伝票は事件に何の関係があるの？」
「それも実はよく分からないデース。でも消えた手拭い、栓抜き、伝票という三つ、三つと言う数字にはちょっとした魔力がありマース。この三つが一斉にあの夜消えたことには、私は何か意味があると思うのデース」
「ふふっ、なら見つけたら教えてくださいな」
　そういって立ち去ろうとする野々江の背中に、
「ああ、ノノエ＝サン。一つだけ聞きたいことがありマース」
　野々江は立ち止まって振り返り、
「何でしょう？」
「裏手の庭を拝見させていただきましたが、何でも昔は立派な日本庭園だったそうネ。確かに大きな池があって、灯籠があって、砂利も高級デース。どうしてほったらかしにしているネ？　綺麗にして公開すれば、もっとお客さんが来るかもしれないヨ？」

「……あの庭は義理の父が作ったものです。義父が死んで、それから夫も死んで――――」
「旦那様のソウイチ＝サンは失踪したらしいネ？」
　金剛が言うと、野々江は押し黙った。
「申し訳ありませんが、少し調べさせてもらったデース」
「ええ、そうです。その通りですわ。一気に男手を二人失って、それから戦争が始まって宗助も戦争に取られてしまったでしょう？　旅館は療養所に指定されるはで、とても庭の整備まで手が回りませんでした」
「わざわざ辛いことを思い出させてしまって申し訳ないデース」
「金剛さん」
　野々江は口を真一文字に結んで、
「金剛さんは、宗助を疑っているのですか？」
　金剛は困ったようにため息を吐いて、視線を地面へ向けた。
「ノノエ＝サン、あなたの気持ちはよく分かりマース。私にも比叡を始めとして三人の妹がいるデース。あの子たちを守るためなら」
　金剛は顔を上げて、野々江の眼を見つめ、
「私はなんでもやりマース」
　遠くで遠来が鳴った。雨が激しさを増した。金剛と野々江はしばらくお互いを睨み合わんばかりに見つめ合った。
　先に沈黙を破ったのは金剛だった。
「ところで、あの池の鯉は見事デスネー。色が綺麗デース」
「そうですか。でも、最近までは色がくすんでて宗助も悩んでいたそうですけどね」
「ほう、そうなんデース？」
「ええ、だから急に色が良くなって今日も『どういうことだろう？』としきりに悩んでいましたよ」
「ふーむ」
　金剛は少し考え込んで、
「サンキュー、ノノエ＝サン。大変参考になったデース」
「ふふ、どういたしまして。ああ、そうだ金剛さん」

「ハーイ？」
「金剛さんは、明日でお帰りになられるんですよね？　それまでに事件を解決できなかったら……」
「明日の朝までにはきっと解決するデース！」
金剛はそう言って、張り切って玄関の方へ向かって行った。

# あの日、何が起こったか？

五日目の朝になった。比叡は着物に着替えながら、金剛が帰って寂しいという気持ちと、ほっとしたという気持ちを胸の中でない交ぜにしていた。

「本当にこれでよかったのかしら」

化粧台の鏡を前に比叡がつぶやく。

比叡の顔は自分で見てもひどいものだった。睡眠不足のせいか、肌は荒れて、口元にニキビが出来ている。目の下にはうっすらと隈が出来ていて、目もショボショボとしていた。これじゃあ、心配されるのも無理はない。

明日は……いや、お姉様が帰られたらお休みを頂こう。どの道、こんな顔ではお客様に心配されてしまう。

寮を出て旅館へ出勤する。空はひとしきり雨が降ったせいか、からりと晴れ上がっていた。裏口から受付の方へ上がると、受付の方で準備をしていた田島が比叡に気づいて、

「あら比叡ちゃん。おはよう」

「おはようございます」

「金剛さんから言伝よ」

「姉様から？」

「ええ、十番の部屋に来て欲しいって」

その言葉に、比叡はドキリと胸が高鳴る。

「でも、仕事が……」

「なんでも、日暮さんの事件を解明したそうよ。女将さんと宗助さん、それに刑事さんもいらしてるわ」

田島の言葉を、比叡は半ば放心状態になりながら聞いていた。自分がどう返事したのかも分からないまま、処刑台を上る死刑囚のように、比叡は二階への階段を上って行った。あるいは本当に、これがそのまま処刑台へ続く階段になるやもしれぬ。

いや、でも、全部バレたとは限らないじゃない。お姉様だって、失敗することはあるわ。

そう言い聞かせながら比叡は十番の部屋の襖を開けた。障子戸の奥には既に金剛、野々江、宗助、大取警部がいた。その光景は比叡が見た夢とまるで同じである。しかし何故か五月雨の姿は無かった。
「グッモーニン、比叡」
このときの金剛は笑っていたものの、いつものようなハイテンションな声ではなく、腕を組んで落ち着いた様子だった。
「おはようございます……」
比叡が力なく挨拶をすると、
「では、金剛さん。あんたが呼んだのはこれで全員かね」
大取警部が確認し、金剛が頷く。
「じゃあ、さっそく聞くが、あんたはこの事件の犯人が分かったのかね」
「イエス」
と、金剛は言った。
「犯人はこの部屋にいる一人デース」
全員に緊張が走った。
「そ、それは私も含めてかね」
大取警部が何だか焦ったように言うと、金剛は笑って、
「オオトリ警部は例外デース！」
と答えは。大取警部はほっと胸を撫で下ろす。本当は結構、小心な人なのかもしれないと比叡は思った。
「ならいったい誰なのかね」
「まぁ、落ち着いて下サーイ。それは順番に、順番に説明しマース」
金剛はゴホン、と咳払いすると、
「まず事件の状況を整理するデース。まず八時五十分前、比叡が日本酒を持って私のところへ、そのあとすぐにヒグラシ＝サンのところへビールを運んで行ったネ。しかしそのとき、ヒグラシ＝サンは酔っ払って暴れ回っていたデース。同時刻、比叡の後から、ヒグラシ＝サンへ会うためにノノエ＝サンが、それを追ってソウスケ＝サンも二階へ上がったネ。ノノエ＝サンはソウスケ＝サンに比叡のヘルプを頼んで一階へ戻った。そのころ八時五十分。隣のサカタ＝サンが隣で

大きな物音を聞いていマース。その後、比叡はサカタ＝サンの母上を一階へ下ろし、ソウスケ＝サンからヒグラシ＝サンの介抱を引き継いだ。その直後に私と五月雨がやってきて部屋を冷やかしたデース。比叡は私たちを部屋に連れて行き、あらためてヒグラシ＝サンの様子を見て手拭いを焼却炉に捨てて宴会場の片づけの方へ回った」
「日暮さんはそのあとで殺されて、階段の方へ運ばれた」
　大取警部が言った。
「そうだろう？」
　すると金剛は、
「それが最初の問題デース。果たしてヒグラシ＝サンはいつ殺されたか？　それがまずこの事件最初の疑問デシタ。私の考えではおそらく――――」
　そういいながら、金剛はテーブルを広縁の方へ回り込んで、
「ヒグラシ＝サンは八時五十分の時点で頭に既に一撃を受けたものと思いマース」
「なんですって！」
　大取警部が驚きの声を上げた。
「おそらくヒグラシ＝サンは暴れた拍子に転んで、テーブルに頭を打ち付けたネ。サカタ＝サンが部屋を見に行った時に、既に障子の向こうには倒れたヒグラシ＝サンがいたデース」
「ちょっと待ってください」
　宗助が声を張り上げる。
「するとあなたは、僕と比叡ちゃんのどちらかが犯人だと？」
「いえ、それは違いマース」
　比叡は首を横に振った。
「その時点であなたは、いや、あなたとノノエ＝サンはこの部屋には近づいてもいなかった。あなたたちが来たのは比叡がサカタ親子と一階へ下りる途中デース。何故なら私がその後に来た時、廊下の外には空のビール瓶が置いてあったネ。もし本当にあなたたちの二人が来ていたなら、間違いなくどちらかがが気を効かせてビール瓶を引き取っていたネ。そうしたことを踏まえ、総合的に事件を考えると犯人

は――――」
　比叡の頭から血の気が引いた。そうだ、確かに私がビール瓶を引き取ったのは最後の最後だ。それは板前の市川さんも見ている。
「ノノエ＝サン、あなたデース」
　その一言で、比叡は横面を引っ叩かれた気分になった。大取警部も、宗助も野々江も、誰もが唖然とした表情を浮かべている。
「なっ、なっ、なっ、何を言ってるんですかお姉様！　日暮さんをテーブルに突き飛ばして殺したのは私ですよ！　あの人が酔っ払って、無理やり私を……」
　比叡の自白に金剛は首を振って、
「ヒグラシ＝サンが死んだかどうか、確かめたネ？」
「そ、それは……」
「比叡さん。日暮さんはね、テーブルに頭をぶつけた後、何者かに殴り殺されているんだよ。少なくとも日暮さんは一度蘇生して、自分の頭の傷を確かめている。血痕が、彼の指に付着していたんだ」
　大取警部が説明した。
「そ、そんな」
　比叡はわなわなと震えて、畳の上にへたりこんだ。
「じゃあ、なんで……」
　比叡が宗助を見上げると、宗助は手を固く握りしめて比叡から目を逸らした。
「ソウスケ＝サンを責めることは難しいデース。彼は恋人と母親、二人に挟まれてちょっと辛い立場にあったネ」
　金剛が言った。
「私は当初、この事件を単純なものだと考えてたデース。ところがこの事件には動機もなく、計画性も無く、証拠も乏しいの三重苦だったネ。今言った通り、事件の発端は比叡がヒグラシ＝サンを突き飛ばして気絶させたことにありマース。そしてそのあと、犯人によって改めて殴り殺されたネ。そうすると見方が変わってきマース。事件は一つではなく、二つ発生したのデース。さて、前提が色々と変わって来たところでもう一回、事件を再構成するネ。比叡は気絶したヒグラシ

＝サンを部屋に残し、サカタ＝サンを一階へ案内したネ。その間に部屋に来たのがノノエ＝サンデース。ノノエ＝サンは頭から血を流して、起き上がろうとするところへ栓抜きを一撃したネ」
「凶器は栓抜きかね。しかし、現場の栓抜きからは血痕の反応は無かったぞ」
　大取警部の質問に、
「この部屋には栓抜きが二つあったデース。最初に部屋へビールを持ってきた女中と、比叡が持ち込んだ分の二つネ」
「先生ェー」
　襖が開かれて、服を泥だらけにした五月雨が現れた。
「見つけましたよぉー」
　その手には、輪っかの変形した、少しさび付いている栓抜きが握られていた。
「そんな！　どうして！」
　宗助が狼狽した。
「教えてくれたのは池の鯉ネ。鯉の色合いは、餌や水中に含まれる鉄分によって変わるデース。池の中に栓抜きを隠したのは、ソウスケ＝サン、あなたネ？」
「しかし金剛さん、母が日暮を殺した証拠はあるんですか？　指紋は拭き取ってありまずから、その栓抜きが誰によって使われたかは分からないでしょう」
「うーん、痛いところを突かれたデース」
　金剛は笑って、困ったように頭をかいた。
「だけど、あなたはノノエ＝サンの持って行った伝票を追いかけて二階へ来たデース。少なくとも、比叡が去った後でこの部屋を最初に来た人間はノノエ＝サンということで間違いありまセーン。確かに合流したソウスケ＝サンがヒグラシ＝サンを栓抜きで殴りつけたという解釈も出来なくもないデース。でもそうすると後の話がおかしくなりマース」
　そう言って金剛は五月雨のそばを通り過ぎ、部屋と廊下を隔てるふすまの近くへ来た。

「比叡、あなたがサカタ親子を一階へ下ろすときに、廊下に誰かいたネ？」
「いえ……」
　比叡は首を横に振った。
「するとそのとき、まだノノエ＝サンとソウスケ＝サンは受付のところへいたデース。ここは受付から最も遠い部屋、さっき計ってみましたが端から端まで少なくとも二十秒かかりマース。比叡がサカタ親子と下へ降りるわずかな間に、ヒグラシ＝サンを殺して廊下を歩き、下へ降りるのは厳しいデース。走ってもドタドタと足音が響きマース。比叡が戻った時、部屋にはソウスケ＝サンがいたデース。ソウスケ＝サンは事件の発覚を隠ぺいするために、比叡は自分が殺したと思い込んで死体を階段へ運ぼうとしたネ。そのとき、思わぬ乱入者が部屋に現れたデース！　それこそ私と五月雨ネ」
　金剛は出入り口のふすまから、当時の状況を再現するように再び部屋へと戻った。
「そこで二人は急きょ、死体を広縁の椅子に座らせたデース。ソウスケ＝サンは自分が隠れると同時にあたかもヒグラシ＝サンが生きているように見せかけるために手を動かし、比叡は恐らく手拭いでテーブルに残る血痕を拭いていた、そうじゃないかネ？」
　金剛の問いに、比叡は頷く。
「だけど、この作戦、ひどくリスキーデース。もし私がズカズカと奥へ進んで、ヒグラシ＝サンの死体やソウスケ＝サンを見つけていたらどうするつもりなのデショー？　現場には既に布団が敷かれていて、押し入れは空っぽデース。それなら死体を押し入れに隠して、奥に隠れてた方が簡単デース。一緒に掃除をしててもいいネ。ヒグラシ＝サンはトイレにでも行ったと理由を付ければいいデース。では何故、そうしなかったのデショー？」
　金剛は比叡と宗助の間に入り、押し入れの前に立った。
「オオトリ警部、ちょっと手伝うネ」
「おう」
　金剛は大取警部と共に押し入れの下から布団を出しながら推理を

続ける。
「先ほど述べたように、ヒグラシ＝サンを殺して一階へ行くまでの時間はありませーン。ではノノエ＝サンはいったいどこへ行ったのデショー？」
たがて押し入れが空っぽになり、金剛がその中へと入った。
「人が忘れ物をするときと言うのは、いつもと違った行動をした場合に起こるデース」
そう言って金剛が押し入れから出てきたとき、その手には一枚の紙が握られていた。
「それは！」
野々江が思わず口を押さえた。
「そう、あなたが失くしたという伝票デース。しっかりと、事件当日の日付が書き込まれていマース。あなたは私と五月雨が部屋に来た時、この押し入れに隠れていたのデース！」
「だから何なんです！」
宗助が声を張り上げた。
「それが、母が日暮を殺したという証拠になり得ますか！　第一、母には日暮さんを殺す動機なんてないじゃないか！」
「ノノエ＝サンは時折、ヒグラシ＝サンからお金を無心していたようデスガ？」
「そ、それは……確かにそうですが、額は少額でしたし、それで人を殺すなんて」
「そう！　それがこの事件のラストクエッションにして、ファーストの事件ネ。失礼ながら、私はヒグラシ＝サンとこの珍受荘の関係を調べましタ。現在、この二つの債務関係はとっくの昔に終わっていて、ノノエ＝サンがヒグラシ＝サンにお金を渡す理由はナッシング！
ではどうして現在位に至ってもノノエ＝サンはお金を渡し続けているのかナ？　恐らくヒグラシ＝サンはノノエ＝サンを脅迫していたネ」
「脅迫ですって？」
大取警部が狼狽して言うと、野々江の顔が青くなった。

「手掛かりは二つありマース。まず、ヒグラシ＝サンの部屋に残されたノート。これはどうも日記のようデース。日付と共にこんな記述を見つけました。

『一九三九年　五月一日　珍受荘、裏手の庭にて大変なことが起こる。』

この日記はこれ以降、白紙デース。どうも大変、ショッキングな出来事が起こったようデース。次に、新聞広告デース。ノノエ＝サン、あなたはこの年の五月九日と、七月七日、それから十一月八日に新聞広告を出してマース。旦那様が失踪したネ？」

「ああ！」

野々江の身体が畳の上に崩れ落ちる。

「そして何故か手の付けられていない珍受荘の裏庭、私の推理はこうデース。ノノエ＝サン、理由はわかりませんが、あなたは一九三九年五月一日、旦那様を殺して裏庭に埋めたネ！　そのとき、ヒグラシ＝サンに見られたか、あるいは二人で共謀して旦那様を殺したか、私は恐らく後者だと考えマース。戦中のことで警察もろくに捜査できなかったとはいえ、無実を立証する証人がいなければ追及をかわすのは厳しいデース。この事件のゼロタイムはそこなのデース！」

金剛が指をパチンと弾くと、野々江の身体が正気を取り戻したように震えた。

「ノノエ＝サン、正直なところ伝票だけではソウスケ＝サンの言う通り、証拠としては弱いかも知れませーン。ですが、裏庭を捜索すればそこには十数年前の事件の確かな証拠が出てくるネ。あなたの旦那様、ソウイチ・シキシマ＝サンの遺体が！」

金剛の言葉が雷のように部屋の人々を一撃した。何という事件であろうか。今の今まで自分が事件の当事者であると思っていた比叡は、この事件の全貌から比すると端役に過ぎなかったのだ。

野々江が宗助に支えられながらよろよろと立ち上がる。

「押し入れに隠れたのは、顔に返り血がかかったからです。その他は、全てあなたのおっしゃる通りでございます」

野々江が頭を垂れた。

「母さん！」
「あとは警察署の方でゆっくりと調べるデース。さ、行くネ五月雨」
五月雨を伴い、金剛は部屋を出て行こうとする。
「ど、どこへ行くのかね金剛さん」
大取警部が訊ねると、
「私たちはこれでチェックアウトしマース！　あとはよろしく頼むデース。ああ、あとこのノートと伝票をお願いしマース」
金剛は大取警部に伝票とノートを渡す。
「金剛さん！　あなたは比叡ちゃんを何が何でも守るつもりでは無かったの！」
野々江の声に、金剛は背中を見せたまま、
「自分が人を殺したと思ったまま、ずっと生きる方が辛いと思いマース。今のあなたのようにネ」
と答えて廊下の向こうへと消えていった。
比叡は警官に立たせられ、事後従犯の容疑で逮捕されることになった。キラリと、部屋の中で手錠が光った。
そこへ、
「手錠は勘弁してやれ」
大取警部が渋い顔を作って言った。

# エピローグ

結局、比叡の事後従犯の容疑は、宗助に騙されていたこともあって無罪放免となり、すぐに釈放されることになった。

野々江はともかく、宗助は情状酌量の余地があるとして、刑はうんと軽くなるらしい。今後の裁判次第ではあるが、少なくとも一、二年は刑務所の中で過ごすことになりそうだった。

珍授荘の経営は田島に移って今も続いている。ただし事件がマスコミで広まってしまったため、名前を変える必要に迫られた。

さて、比叡はというと――。

「本当に行くのかい？」

田島ががっかりしたような顔で言った。それを見ると比叡は少し心が揺らぎかけたが、歯を食いしばって、再び決心を固めるように、

「はい、もう決めましたから」

と、鞄を片手に靴を履き、玄関ロビーから立ち上がった。比叡の服装は、ここへ来た時と同じ、艦娘の装束へと戻っていた。

「あんなことがあったから無理も無いし、こっちも本当は引き留めちゃいけないんだろうけどねぇ」

田島は俯きながら、

「あんたは、結構みんなから好かれていたんだよ。女将さんだって、あんたを若旦那の嫁にしてやろうと思ってたくらいなんだ」

「ヒエッ、それじゃあ、みんな私と宗助さんが付き合ってたこと知ってたんですか！」

「隠し通せていると思ってたのかね。あんたも若旦那も鈍いねぇ」

比叡は顔を赤くして俯いた。

「その顔だと、まだ未練があるようだね？」

「ええ、まぁ」

「だったら……」

「それでも、やっぱり行かなくちゃ。やっぱりここは、私にとって旅の途中だったんです。こういうことが起こったのも、そうした縁なので

しょう」
「そうかい」
田島はため息をついて、
「じゃあ、体には気を付けるんだよ」
「お世話になりました」
そう言って、比叡は頭を下げた。覚悟を決めたはずなのに、最後は涙声になってしまった。田島も涙ぐんで、
「元気でねぇ」
「田島さんこそ、お達者で」
比叡は玄関へ向けて歩き出す。今日も照り付ける程の日差しが地面へ降り注いでいた。セミの鳴き声が洪水のように森の中をこだましている。ふと、遠くの方で太鼓の音が聞こえた。
ああ、そういえばもう夏祭りの季節だっけ。
数日前に神社の前で思ったことと、そっくり同じことを比叡は思い返す。
「最後に旅の安全を祈願しておきますか」

神社へと辿り着く。そこは数時前に来たときよりも、祭りの飾り付けが進んでいて、大工が境内の中に大きなやぐらを組み立てていた。毎年、あのやぐらを中心に、みんなで盆踊りをやっていたことが思い出される。
でもこの夏は、その中に私の姿はない。
そう思うと切なさで胸が締め付けられるような思いになった。
いけない、こんなことじゃ駄目だ。
神社の本堂へ向かい、賽銭箱に小銭を投げて鈴を鳴らし、二礼、二拍手、一礼する。
「祓い給え、清め給え、守り給え、幸え給え……」
三度唱え、旅の安全を祈って後にする。ふと、絵馬掛けに奉納された絵馬が目についた。
「あら?」
比叡はその中に、何だか見慣れた筆跡を見つけたのだ。

これは……。
近づいて手に取ってみると、それは金剛の筆跡だった。そこにはこう書かれてあった。
『比叡が自分の幸せを見つけられますように』
「ううっ、ああっ……」
比叡は大粒の涙を流して、絵馬を握りしめた。
「お姉様、ありがとう……ごめんなさい……」

同時刻、東京都、金剛探偵事務所にて。
「ん？」
金剛は口に運びかけたアイスティーのコップを止めて、自分デスクの後ろ、晴れ渡った青空を振り返った。
「どうしましたぁ？　先生」
五月雨は飼い猫のフーちゃんを膝にのせて、自分とフーちゃんをうちわで扇いでいた。
「いや、比叡の声が聞こえたような気がしてネ」
比叡の名前を出すと、五月雨の顔に暗い陰がよぎったが、あえてそれを吹き飛ばすように明るい調子で、
「もう、暑さのせいで幻聴が聞こえてるんじゃありません？」
「そうかもしれないデース」
そう言って金剛はアイスティーを飲んだ。
「そろそろエアコン、いえ、扇風機くらい買いましょうよ」
「そうだネ。そうすれば熱い紅茶が夏でも飲めるデース」
「恐ろしいことを言わないで下さい」
「にゃーん」
同意するようにフーちゃんが鳴くと、アイスティーの中に入れた氷がカランと音を立てた。
戦艦探偵・金剛　～比叡の悲劇～　了